
＋～ten～

チャーハン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十々ten

【Nコード】

N4995F

【作者名】

チャーハン

【あらすじ】

人々に害をなす妖魔。退魔士『佐神勇刀』は妖魔を封魔（封印）することができる人間。ある日、お約束のような出来事で出会った少女『阿神華奈』。佐神勇刀の運命の物語が始まる

序章　出会い

世の中には、妖怪、怪物、魑魅魍魎等の人間以外の生き物が存在している。

人々に害をなす、それらの存在をまとめて『妖魔』と呼ばれている。

妖魔は、普通の人では傷をつける事ができない。だから一般人では、妖魔を退治する事ができなかった。

しかし、その妖魔を退治できる力を持った者がいた。彼等は「退魔士」と呼ばれている。

この話は、そんな退魔士達の話である……。

序章　出会い

「うおおおおー!!」

朝の清々しい空気の中、奇妙な叫び声で俺の朝が始まった。

えっ?なんで叫んでいるかって?

これが叫ばずにいられるか!俺は今遅刻ギリギリで学校へ走っている。わかるだろ?めっちゃくちゃ慌てているんだ。

……だからだろうか、俺は前方の曲がり角を確認もせず、勢いよく曲がった。

ドガッ!!

案の定、俺は何かにつかった。とりあえず怪我はしてないようだ。車にぶつかった訳ではなさそうだ。

そんなことを考えていると前方から気配を感じた。

「いたいわね!アンタ、一体何処に目付けてんの!」

いきなりぶつかったであろう少女がそう言った。

「えっ、何処って此処だが?」

そうやって俺は自分の両目を指差した。

「そんなことでもいいの！アナタ、あたしを女だからってなめてるの！？」

「残念だが俺は、朝から変態チツクなことはしない主義なんだが……」
 そう言つて俺は手元の腕時計をみた。学校には9:00に着かなければならない。ここからだと約15分掛かる。

時計の短針は9の近くを指し、長針は11を指そうとしていた。

何かを思い出したのか、少女は俺にベエーと舌をだし、俺が通った道を走っていった。

「なんだ、あいつ？ぶつかつていて詫び無しかよ」

俺はそう吐き捨てながら、学校へ全力疾走した……

序章へ出会いへ（後書き）

初めての作品です。読みづらい箇所や意味の理解できないところもあると思います。稚拙な文章であることを詫びておきます。

一章　～協同～

キンコーンカーン♪

無情にも朝の憎いメロディが鳴り響く。だがしかし!!

「つはあはあはあ……」

「んー？　どうした？　そんな慌てて……？」

息を切らして教室にはいつてきた俺をみて、同じクラスの大城が声を掛けてきた。

「な、なん……でって、はあはあ……。始業の時間が……」

そう言つと大城は、はあ？　という顔をしている。

「お前……時計も読めねーの？　まだ5分前だぞ。さっきのは予鈴だ」
「なっ！？」

そう言つて俺は腕時計をみた。

「俺の時計……9時になつて……？」

俺は首を傾げた。そんな俺を見て、大城は

「お前、昨日『今日は遅刻ギリギリだったなあ。時計5分進めとくか』って言つてたじゃん。」

ああ、なんて事だ。そんなことって。

「てか、聞いてくれよ！　今日転校生がつて……おーい………へんじがない。ただのしかばねのようだ。」

今やしかばねと化した俺。なにもない只の一般的な高校生。

名前は『佐神勇刀』ちなみに『ゆうと』って読む。

まあ唯一他の人と違つと言えば、俺が『退魔士』つてところかな。

どうやら、我が家が代々伝わる退魔士の『沙神』家の一族だからしい。字が違つのは知らない。恐らく長い月日で変わってしまったんだろう。

退魔士になって、得したことなんてたいしてない。損な力だな、とつくづく思う。

『おい』

全くホントに…

『おい！コラ！』

嫌な……

『目を覚ませ！』

…ええい誰だ？俺の眠りを妨げ…

『ドラア！！』

ゴッソ！！

「ヒデブ！！??」

突然の衝撃。俺の目が覚める。

「オラ。もうHR始まるぞ。先生くるぜ？」

俺の近くに立っている大城がそう言った。

「っおお！？あ、ああ。ん？…なんだか頭が痛」

「ほら！さっさと席につけよ」

「????」

痛む頭をさすりながら俺は、しぶしぶ席についた。その刹那…

ガラガラッ

「オッハー♪」

一昔前に流行った挨拶を繰り返しながら、教室に入ってきたのは、担任の『新山 千春』教師だ。いやもうムチプリの美しい人だ。ちなみにうちの学校では、『新山千春の会』というものである。

それほど人気のある人だ。俺は一桁ナンバーの会員証を持っている。フフフ。

「ハイみなさん♪今日はなーんと、転…」

「転校生がくるんだろ！？先生！」

おい、大城。横槍いれんな。殴るぞ。

「チッ。情報速いわね♪大城く〜ん♪」

横槍にも怯まないとは、さすが新山先生。俺達に出来ないことを

平然とやってくれる。そこに痺れる憧れるう！

「じゃあ、紹介しまゝす」阿神華奈ちゃんよゝゝ」

そういうと、教室に入って来たのは、ややロングの髪、セミロングってやつかな？そして整った顔つき。服越しでも解るスタイル。新山先生には敵わないがな…、それでもおそらく美少女という部類に入るだろう。

……なにより今朝俺とぶつかった少女…！？

「……え？」

なんと転校生というのは、朝会った（？）少女だった。なんというお約束…。

が、俺が驚いたのはそこでなく、いやそれでも驚いているが…、そいつの姓が阿神かはねだということだ。

……阿神…：我が家の『佐神』の姓と相反する存在。代々我が家と争っていた家系だ。

そしてなにより…奴が俺の…幼なじみだという事実だ…。

「なんか、佐神君とゝ、苗字がにてるからゝ、佐神君の隣の席でゝゝ」

ちよつと新山先生！その優しさは好意に値するけど…。そいつとは仲がよろしくないんです！だから…！！等と言えるはずもなく、俺は渋々了承した。

だって俺の横しか席が空いてないんだぜ？あーあ、隅っこの席だからヤッターと思っていたのに。

ふと横を見ると阿神はもう席にすわっていた

「久しぶりだな。阿神サン」

俺は嫌味たらしく挨拶を試みた。すると

「あら？朝いきなりあたしにぶつかってあたしだと気が付かずそのままぽけつとしていた佐神君じゃない。久しぶりね。」

一の嫌味に対して五十の愚痴で返すとは…侮れん。

「まあ、小さい頃から退魔であたしに、ま・る・で歯が立たなかった勇刀君だもんね。紳士的な対応なんて出来っこないわよね。ねえ

「勇ちゃん♪」

…訂正。一に対して百だ。つかアンタ鬼ですか？俺、泣きそう。確かに阿神華奈は俺より、妖魔と戦える力を持っていたが。…おそらく今でもそうだろう。はあ…

その後地獄のHRが終わろうかというところで事件は起こった。

『キヤアアアア！！』

「ツ！！！！」

廊下で叫び声が響いている。俺は急いで廊下に飛び出した。嫌味たらしの幼なじみと同時に。

廊下に飛び出した俺の視線の先には…

「ツ！怨狐か！？」

俺が見た先には、生徒の数人を青い炎で取り囲んでいる光景だった。

怨狐とは、元々山にすむ護り神の種族だった。

その時は『縁狐』と呼ばれているが、人間が行う散々な悪行に絶望した縁狐が突然変異により、妖魔になってしまふのだ。

「とにかく、速く対処しないと…！」

そう言っただ俺は構えをとった。

「召喚！封魔刀、霊魔刀！！」

その瞬間、俺の手には一本の刀が現れた。退魔士は普通、このように何か武器を召喚することで、妖魔と戦う。

そして俺が召喚したのは霊魔刀…神の霊が宿っている刀で妖魔にかなり効く武器だ。

「よし！いく……」

ダンツ！ダンダン！！

「ギイイイイアアア！！！！」

「へ？」

飛び出した俺の前で怨狐が叫びだし、そして……消えた。

「他愛もないわね」

そう言っている阿神の手には、銃が握られている。

封魔銃…中々遠距離武器の一つだ。

「お前…銃士なのか？」

退魔士の中でも銃を使う奴は珍しい。しかも俺の知る阿神家は、代々近距離武器を扱う家系だったから、尚更だ。

「そうだけど？ってそれより、捕まっていた人達を介抱しないと。」

「あ、ああ」

そうして事件は、呆気なく幕を閉じた……。

その後、阿神は皆のヒーロー…いやヒロインか？として、早くも人気者になっていた。奴の席のまわりには、集団ができていた。

「スゴいわ！阿神さん」

「全くだ。佐神なんかより、全然頼りになる！」

「奴より速く妖魔を退治するなんて！やるな」

「お姉さまになってー！」

くっそー！言いたいこと言いやがって。ん？変なこと言ってる奴が…？……気のせいかな。

「佐々神。残念だなあ。退魔士のプライド持ってかれて。」

ニヤニヤしながら大城が言ってきた。

「む。うるせ。確かに悔しいが、これからだよ。これから！」

ちよっとイラッとしてしまった。だけど、奴には負けてられんな…。

「まっ、せいぜいがんばれよ。」

そう言っ大城は、集団の中に入っていった。薄情者。

時が経つのははやいなあと思うと、もう放課後だ。

俺はそそくさと学校を後にした。だっていつまでもいるとからかわれるもん…。

だけど、俺の隣にはいたんだ。

「あーんた、何逃げてんの？」

阿神だ。

阿神は挑発的に言ってきた。

「残念だが、俺は放課後はさっさと家に帰る主義なんでね」

素直にいうのはカンに障るので、適当に答えた。

「学校にいても、久しぶり、の一言しかないのはどうしてかな？」

ニヤニヤしている…。こいつ、解って言ってるな？俺がからかわれているって。

「何だよ？何か言ってほしいのか？華奈ちゃん」

嫌味っぽく言ってみた。全くこいつだけは本当に苦手だ。

「べ、別に何もないわよ」

なんか反応が変だな…そうだなあ……

「会いたかったよ、華奈！！」

ガバツと両手を広げてみせた。

「……………うわあ。引く」

「……………シクシク」

「ぶっあはは」やっぱアンタ、オモシロイ」

どうやら遊ばれているのは俺のようだ。やっぱり苦手だ。

そんなこんなで俺の家の前に着いたわけだが…。

「お前、どこまでついてくるんだ？」

もう家の門をくぐったのに、阿神はついてくる。

「おい！」

「…アンタ、何も聞いてないの？」

どういうことだ？

「阿神家と佐神家が協同戦線張るって話。」

えっ？なんだって？

「だから、阿神家と佐神家が」（以下略）」

WHY？なぜ？なんでそんなことする必要があるんだ？

だいたい、阿神家と佐神家はいがみあっていたっていうのに…。

「って、まて。百歩譲って協同戦線張るのはいいとする。でもなんで俺の家までついてきてんだ？」

見ると目の前は俺の家の玄関だ。

「さっさと自分家帰れよ」

「…こ、ここに住むんだから仕方ないじゃない」

うつむきながら阿神がそう言った…はずだ。だって小声で聞き取りにくかったもん。じゃなくて

「ど、どういことだ！？なんでお前と一緒に！？！？」

さすがに混乱する。奴の一言は俺の脳を揺らした。それほどの威力があったのだ。

ちなみに俺の両親は異国で修業（旅行）をしているらしく、家では俺が一人で生活している…。そして俺らは高校生。いろいろとヤヴァいんじゃない？。

ふと見ると阿神はまだうつむいている。

「あ、あたしだって嫌よ！アンタなんかと暮らすなんて！でも…あたしとアンタの親はそれを了承して……。『あんなヘタレ息子なら安心しろ』って…アンタの父親が背中を押して……。」

顔を真っ赤にして俺に愚痴ってきた。あんの馬鹿親父め…、覚えていろよ。

そうして、俺こと『佐神勇刀』と『阿神華奈』との協同戦線もいい、協同生活が無情にも始まったのだった。

……………夢なら覚めてくれ。

二章　過去

「ばいばい……。」

走りだす車。それを追い掛ける僕。

いくら速く走っても、人間の僕では車に追いつけない。

そして、車が……華奈ちゃんの乗った車が、見えなくなってしまった。いくらその名を呼んでも、返事は返ってこない……。

「華奈ちゃん。華奈ちゃん……。」

とうとう僕は、泣いてしまった。僕があんなこと言わなきゃよかったんだ。僕があんなこと……。

「うわあああ！！行かないで！！……ってアレ？」

朝の清々しい空気の中、俺の目が覚めた。いやな汗を体中かいている。

ガラッ

「アンタ、五月蠅いわね。いい年こいて悪夢なんかで起きるの？全く……」

朝の空気をぶち壊す奴の……阿神の声……。まあ既に悪夢でぶち壊したが……。

「なんでもない……。なんでもないんだ……。」

俺はとりあえずごまかそうとした。が……

「ふーん。」

なんとかごまかせたか。よかった。

「華奈ちゃん！華奈ちゃん！」

「ツツツ！！！！！！！！」

「何がなんでもない、よ。おもいつきり唸ってたじゃない？」

こいつ、泣かしてやるのか？

「あたしを泣かそうとは思わないことね。昔みたいに、あたしが泣かすわよ？」

お前は超能力者か！？つと本気で思ってしまった。心を読むなんて反則だろう……。

「そんなことよりアンタ……」

突然声のトーンが下がった。どうしたんだろ？

「もう8時半よ？学校、ここから15分掛かるんでしょ？」

……えっ？何だつて。8時半だつて。

……ヤバイ！！遅刻してしまう！飯食う時間がない！朝の補給である朝食が食えないとは、俺には致命的だ！！

「さっさと着替えたら？」

しれっとした顔で言ってくる。畜生！

「なんで起こしてくれなかったんだ！？」

当然の台詞を投げかけたが……

「アンタ、起こさなくていいって言っただじゃない。」

あっさりかわされた。じゃなくて……！

「俺がいつそんなこと言っただよ！？」

今はもう頭がいっぱいだった。主に朝飯のことで……。

「昨日。もう忘れたの？」

ヤレヤレという顔で、阿神は言ってきた。更に続けて、

「全く、アンタはホントに世話かかるわね！いい！？アンタは昨日

……」

混乱する頭で阿神の話を聞いた。どうやら俺は、

『朝ぐらい自分で起きる！』

と言っただらしい。しかもややキレ気味で……。そしてそのツケがこれだ。

「とにかく、早く着替えたら？」

切り替えの速い奴だ。その性格を少し分けてもらいたいね。そこでふと気付いた。

「……なあ」

「なによ？」

「着替えたいんだが……。」

「着替えればいいじゃない。」

こいつホンキで言ってるのか？

「下着も替えたいんだが……。」

実際俺の着ているものは汗でビショビショだ。

「……………あつ！？」

ボタンー！！

やっと気付いたか……。さてと奴は出ていったし、さっさと着替えて、飯食って、って時間ないんだっとな。

ハアと溜息をついた。今日は朝から散々だな……。

学校につくと、俺は机に突っ伏した。なんでって？それは……

「腹減ったあ…………。」

そう！俺は結局朝飯を食えなかったのだ。ああ、あのあつたかいほかほかご飯。そして納豆、味噌汁。オプションで海苔、漬け物。そんな『和』の食事が俺を待っていたのに……。だが飯を犠牲にしたおかげで遅刻はしなかった。それはよかった。が……。

グウウウウウウ！

理性はよかったと思っても、生理的には納得してくれなかった。

いや人間はややこしいね、全く。

「おおい、すごい音だな。腹。」

「……………大城か。なんだ？」

つたく、またからかいにきたのか。テキトーにやり過ごして、空返事を……。

「……なあ！聞いてるか？佐神！」
うるさいな。

「なんだよ？」

「だからさ、変なんだよ、最近。」

「安心しろ。お前はいつでも変だ。」

「ひでえ！……って俺じゃねえ！後輩なんだよ、おかしいのは…………。」

「お前のがうつったんじゃないのか？」

「人を病原体みたいに言うな！」

「冗談だよ。で、俺に相談するってことは……妖魔つながりなのか？」

腹減りのことも完璧に忘れて…、いや忘れてないけど、俺は大城の話を聞いた。

「そうじゃないかな、と思っている。俺がテニス部なのは知ってるな？」

「……ああ。」

忘れてた。大城は体格がよく、身長も175cmの俺に対し189cmもある、大柄な奴だ。

てつきりバスケット部かと思いついていた。そっかあ、テニス部か。

「……忘れてたな。まあいい、とりあえず放課後テニスコートに来てくれ。そこで説明する。」

コクンと頷き答える。じゃ放課後、とその場を立ち去る大城を、呼び止めた。

「なんだ？」

「なあ。なにか食うもんじゃない？」

「……ない。」

大城はそう言っ、自分の席へ戻っていった。

「腹減ったあ……。」

そんな事を呟いていると俺の隣に影ができた。

「あ、あの……。佐神君……。」

「ん？」

見るとそこには、小さい女子生徒が。たしか……

「田神さんだっけ。どうかした？」

隣には小さくて可愛らしい、田神さんがいる。

大城の話では、誰もが参る可憐な妖精。らしい。成績も優秀って言うってたな……。そんな田神さんがなんの用だろう？

「あ……あの、……。これ、よ……よかったら……。」

差し出された手の中には、包装されたおにぎりが……。

「く、くれるの？」

彼女の首が上下に動いた。俺は泣きながら、

「ありがとうございます！ありがとうございます！」

と一生懸命お礼を言い、手に取ったおにぎりを口に含んだ。

「ッ……！」

うまい！おにぎりってこんなにうまかったか？うう、こんなにうまいおにぎりは初めてだ！感動した！！

「ごちそうさまでした！」

あつという間に食べ終わった俺はそう言い、彼女の手を取り、こんなに優しい人がいるなんて！と号泣した。

なんだなんだとクラスの奴らがこっちを見ている。はっ！と気が付いた。

田神さんが、耳まで真っ赤にして俯いている。恥ずかしくもなるだろう。こんな変な奴に号泣されているのだから……。

「ゴ、ゴメン……！」

そう言い手を離れた瞬間、田神さんは教室を飛び出していった。

後で謝っておこうと思った。

……その後、俺はクラスの奴らから長い尋問を受け続けたのは言うまでもない……。

未だに胸がドキドキしている……。心臓の鼓動が激しくなるのが解る……。手に温もりを感じる……。

「手、握られちゃった……。」「

ぼつりと呟いてみた。改めて思うけど、結構大胆な事しちゃったな……。

今私はトイレの個室に閉じこもっている。まさか、手を握ってく

るなんて思ってもなかった。

だから、握られた時…うれしさより驚いてしまった。…それで、教室から逃げ出して…。

「悪いことしちゃったな…。教室に戻ったら謝ろう。」

私は深呼吸をして、彼がいる教室へ戻った…。

「一限目、HRだったっけ…。」

廊下を歩いている田神は、そう呟いた。そして、彼女が教室の扉を開けるとそこには…！

「…！！さ、佐神君！？」

彼女がみたものとは…、壁に張り付けにされている佐神勇刀だった。

「！先生…田神さんが戻ってきました。」

「はい、じゃ、役者も揃ったところで、始めまっす。」

新山千晴がそう言うと、田神は真ん中の机に誘われた。

「あ、あの…、先生？何を始めるんですか？」

恐る恐る田神は聞いた。そして返って来た答えは…

「今から学級裁判を行うのですっ！」

「？？学級…裁判？だ、誰を裁くんですか？」

田神は訳が解らなかったが、新山はもちろん、と言い…

「そこにいる罪人、佐神君ですっ！」

ビシイ！と新山は張り付けにされている佐神を指差した。

「我らの田神ちゃんを泣かした大罪人なのだっ！！」

「えええ！？いつ私が佐神君に泣かされたんですか！？」

田神は必死に佐神を弁護した。あれは誤解です！と、可愛い声ながらも、力強い声で弁護し、被告人佐神勇刀は晴れて無罪となったのだった…。

放課後…俺は傷む身体で大城が待っているであろう、テニスコー

トに向かっていた。

全くなんで俺は張り付けにされてたんだ？って田神さんを泣かしたからか……。結局謝りそびれたし……。よし！明日こそ謝ろう！

そんなことを考えていると、テニスコートが目の前に広がっていた。もうついたか、と思い大城を探した。大城はすぐに見つかった。

「……練習中か……。終わるまで持つかな……。」

その後20分程待っていると、大城がこちらに気付き近付いて来た。

「もうきてたのか。」

「まあ妖魔かもしれないって聞いてるからな。」

大城はじゃ説明しようか、といい俺をテニス部の部室前へ連れていった。

「ここならコートから離れているし、大丈夫だな。」

実際そうだった。テニスコートから部室までだいたい、100M程離れている。

しかも角を曲がらないと、コートからは部室が見えない位置にあるから尚更だ。

「じゃ早速説明しよう。俺は高校初めての後輩をもって嬉しかった。まあそんな俺は、一人で熱心に筋トレをしている一年に声を掛けたんだ。ほら、一年先輩である俺が先輩らしいところを見せれば、株があがるだろ？んで、声を掛けたのは良いんだが、どうもその一年は……。」

長い……。なんかどうでもいいことまで言ってるし。帰ろうかな？まだ大城は話を続けているし。……。ん？大城の口が止まった？なんでだ？

大城の顔を見ると俺の後ろに視線をうつしていた。

「大城？どうした？」

大城につられて後ろを向く。そこには……。

「……。」

俺より背が5cm程小さい、一年生が……。

「あの娘が例の子だ…。ちょっとキツメな感じだろ？」
ぼそぼそと耳打ちしてくる。

…確かに、少しツリ目でどこか冷たい感じがする。でもそれより

……

「あれ一年か？なんつーか…、デカイな…。」

もちろん身長のことではない。そう胸だ。

「お前には阿神ちゃんがいるだろう？あの娘は俺のモンだ。」

ピリッ

「……ん？」

なんだ？この感じ…？嫌な感じがする。

「……？どうした？佐神？」

「おい。部活が終わるのは何時だ？」

「え？まあだいたい7時ごろかな。」

それを聞いて俺は、

「わかった。」

とだけ答えた。

「なんだよ、一体？」

大城は不満そうに言ってきた。

「なんでもない。あと妖魔はいねえ。お前の勘違いだ。」

「えっ！？そうなのか？……ん〜。お前がそう言うんなら。じゃあ俺、部活いつてくるわ。」

そっつい大城はテニスコートに向かった。スマン大城！！嘘ついで！！

辺りはもう暗くなっていた。今は六月だ、外も少しづつ暑くなってくる。

でもその原因の太陽は沈んでいるが。

「もう8時か…。」

腕時計を見て言った。そして次はテニスコートに目をやる。

「いつまで練習するつもりなんだ？あの娘…。」

テニスコートには大城が言っていた一年が、まだ練習をしている。
「おかしい。あの嫌な感じはあの娘からだと思ったのに……。……もう帰ろうかな。」

俺はその場を立ち去ろうとした。が、それは叶わなかった。なぜなら……。

「……！よ、妖魔！？いたのか！」

チツ、と舌打ちをし構える俺。

「相手は『孤狼』か！」

孤狼……群れることを嫌う天然の妖魔。人に取り憑くタイプで、身体能力を向上させるが、その代わりに狼の如く人を嫌い、さらには傷つけるまでに精神が侵されるらしい。

その状態が一月も続けば、肉体を奪われ周りのもの全てを破壊する、狂狼になってしまうのだ。

正直、不安が走った。通常憑畏している妖魔に傷をつけると、憑かれた者も傷をおってしまう。この場合、やはり……。、

「あの娘が憑かれているのか。クッ……！」

憑畏型の妖魔。あの時と同じ事になるんじゃない……。ダメだ！俺には出来ない……！

十年前 俺がまだ七歳のころだ。俺は阿神をつれて神社に行った。その神社はいわくつきで、妖魔がよくでると噂されていた。

その頃の俺は好奇心旺盛で、神社の妖魔を確かめに行ったのだ。

そして……。そこで妖魔がでてきて、阿神が憑かれてしまったのだ。それで俺はやむを得ず阿神を攻撃した……。阿神を助けるために……。

……。事はすぐに解決した。取り憑かれた直後だったので、すぐに妖魔を倒すことができた。……そのとき俺は謝りたかった。でも俺の口から出た言葉は……。、

『あんなのに憑かれんなよ！ノロマ！』

と言ってしまったのだ。そしてその三日後阿神は引越してしまったのだ。

そんな苦い思い出が、いつの間にか俺のトラウマになってしまっていたのだ。

「アオオオオーン!!」

孤狼が襲い掛かる。

「チッ!一か八か!召喚!封魔刀、魔封光!!」

俺は光の刃を出した。そして、振った。

「うまく行け!!頼む!!」

この魔封光は相手との強さで、効果の効きが違う。さらにいえば妖魔にしか効果がない。

もし俺の力の方が強ければ、孤狼を封魔（封印）をすることが出来る。

「アオおおん……………」

孤狼はぺたんと倒れた。

「…!や、やった…!」

うまくいった。そう思った……。だが、

「な、なんでだ!?!なんで封魔が起こらない!?!」

孤狼の姿は消えず、そこにあった。こんなことは今までなかったのに…。

「その子は、妖魔であって妖魔でないですから。佐神先輩。」
テニスコートに抑揚のない声が響いた。

俺は自宅の玄関をくぐった。

「……………」

「あら、遅かったわね。…?どうしたの?」

「阿神…。」

「なに?」

「十年のあの時はゴメンな……」

「ど、どうしたの？突然？」

「いや、思い出したただけだ。俺もう寝るな……。」

「えっ？う、うん。……おやすみ。」

俺は布団の中で考え事をしていた。でもすぐにやめた。明日になれば解るはずだ。と思ったからだ。

俺に過去の戒めを解く方法を教えてくれた、あのおかしな一年生によつて……な。

三章　記憶

世の中つてもんはなかなか不条理で、理不尽なものだ。思っているとおりになんかはなりはしない。

……全くつまらん話だ。

「俺がなにしたっていうんだ……？」

力無くつぶやく俺がいる。俺は十年前のアレで極端に人を傷つける言動はなるべくさけてきた。

はずなのになあ……。

「なんでこの子は泣いてるんだ……。」

俺の腕の中には昨日会ったばかりの一年がいる。

なんでって？　なんでだろう？　なにがあっただろう。

俺は朝早く家をでた。早朝のひんやりとした空気を肌で感じながら、学校へ向かった。

学校へついてからテニスコートに向かった。そこには昨日の一年生が待っていた。

「おはようございます。佐神先輩。」

「ああ、おはよう。」

簡単な挨拶を交わし、俺達は向かい合った。

「昨日はありがと。おかげで、悪魔から開放された気分だったよ。」

「別に、わたしは少しお手伝いしただけですから。」

俺は昨日彼女に過去のトラウマに関する話を聞いた。

それは俺の、トラウマを和らいでくれる結果になった。

どうやら彼女は神社の神主だそうで、十年前俺が行った当時の神

社の神主さんの娘だったらしい。それを聞いたとき、俺は頭を下げていた。なぜかは解らないが、気付くと下げていたのだ。

「頭を上げてください。佐神先輩。」

そつと手を差し延べてくれた。

「あの事についてはもういいんです。それに悪いのは、わたしたちです。」

彼女は言った。

「ああ。ありがとう。」

立ち上がりテニススコートの土をはらい、再び彼女と向かい合った。
「じゃあそろそろ、君と孤狼の正体を教えてくれ。」

そついうと彼女は、はいと言い、話を始めた。

「まずわたしは昨日言ったとおり、あの神社の神主です。そしてあの孤狼は、我が神社に住み着いている精霊の一種です。」

「精霊！？あの孤狼は妖魔じゃないのか？」

俺は戸惑った。俺が孤狼と対峙した時は、てっきり妖魔だとはかり思っていた。

「あの子は『氷狼魔』（フェンリル）という精霊です。他人には全く心を開かない氷の心を持っていて、信頼した人でないと近づくこともできません。」

氷狼魔か…、覚えておこう。…ん？

「なあ、その氷狼魔は君に憑いてるのか？」

「いえ、わたしの親みたいなものですよ。」

そついや精霊は何千年も生きると言われているな。なるほど、氷狼魔は彼女の家に憑いていたのか。

「それでもうひとつ、伝えることが…。」

彼女がそついうと、俺達の周りに50mぐらいの広さの『結界』が張られた。

「おい！どういうことだ！？」

混乱する頭ではそう聞くのが精一杯だった。

「あなたを殺すんです。佐神先輩。いや、佐神勇刀。」

どこまでも抑揚のない声で語りかけてきた。

「わたしの名前、まだ言ってますでしたね。わたしの姓は、『夜神』」

「ッ!!?」

『夜神』? 『夜神』だと!?

「驚いていますね。」

『夜神』はいう。やはり抑揚のない声で…。

「どうして夜神家が佐神を狙う!？」

「…おしゃべりしている暇はありませんよ。召喚! 封魔爪、氷連爪!」

ジャキンと音をたて、夜神の腕から手にかけて蒼く鋭い爪が装着された。そして…

「うわあああ!!」

素早い動きでこちらを攻撃してきた。や、殺る気だ! 本当に…!!

「な、なんで俺を殺そうとするんだ!? 理由を教えてください!!」

「……………」

ズシャア!!

「チィ! 聞く耳なしかよ! しかたない…! 召喚! 封魔刀、霊魔刀!」

刀を喚びだし、構える。が…

「くっ!？」

夜神の攻撃をくらってしまったようだ。俺の左腕から血が流れる。どうやら少し肉をえぐられたようで、かなりの血が流れている。

「どうしました? ボサツとしていると、死にますよ?」

でたらめなスピードで、俺に襲い掛かる。

「くそ! 早過ぎる!」

ガッ! ガッ! ガッ!

ぶっ! ぶしゅ!!

……どのくらい経ったか。

俺の体からは大量の血がながれ、左腕に関しては筋肉の一部が見え隠れしている。

「……………」

助けはこない。当然だ。ここは結界の中。結界の中は外からでは見えない。

いや、正確には見なくなる、と表現したほうがいいか……。結界がある場所には誰も近付こうとしなくなる。すなわち、人々からその場所の興味を無くすのだ。

「このままじゃ、本当に死んでしまう。」

残念だが俺は彼女に、夜神に刃を向けることが出来なかった。

俺を殺そうとしているとはいえ、俺が過去を断ち切るきっかけをつくってくれた。それに、相手は女の子だ。

「…殺せるわけないだろ。くそ！」

自分に愚痴をこぼす。夜神は殺したくない。でも俺も死にたくない。

死にたくない死にたくない死にたくない殺したくない殺したくない死にたくない……………」

頭の中で二つの言葉がこだまする。とその時だ。

ドクン！！！！

「…さあ、そろそろとどめです。佐神勇刀。」

夜神は佐神に向かって、蒼い爪をたてる。が、それは叶わなかった。なぜなら、佐神勇刀が……、

「き、消えた……………」

夜神は戸惑った。そこにいた佐神が消えたのだ。

「ッ！どこに！？」

「ここだよ。」

夜神は振り返る。そこには、神々しいオーラを放つ佐神がいた。手には二本の剣をもっている。

「佐神勇刀…！なぜ？」

夜神は理解出来なかった。さつきまで傷だらけで動くこともままならない様子だったのに、見えない速さで夜神の後ろに移動しているのだ。

しかし、更に驚くことを夜神はきいた。

「違うよ。僕の名は、『沙神悠刀』（さがみゆうと）。」

「っ！？」

夜神は理解出来なかった。だが彼は続ける。

「悠刀の悠は『悠久』の悠。遠い過去から変わらない信条。その信条とは…。」

夜神は息をのんだ。佐神、いや沙神からでる不思議なオーラが強くなっていると感じたからだ。

ビリビリと夜神はそれを感じる。そして沙神からでた言葉にまた更に驚いた。

「不殺の精神。誰も不殺に敵を狩る。」

そうして、沙神悠刀の攻撃が始まった。

「！？馬鹿にしてるのですか！？わたしはあなたを殺そうとしているですよ！そんな相手を不殺に戦うなんて…正気ですか！？」

夜神は戸惑った。彼の言動もそうだが、なによりもあのオーラに戸惑っている。今まで戦ってきたどの妖魔もあんな神々しいオーラをまとったものなどいなかった…。

「悪いけど、我慢してね…！」

走る閃光。彼が動いたたびに光の緒が残る。姿は確認できている…、そう思って攻撃をする。

が、全て空振りに終わる…。

「ッ！！は、疾い！追いつけない！」

「君がいくら夜神家の人でも、僕の動きにはついてこれないよ。」

わたしの身体は彼からの攻撃でボロボロになっていた。だけど彼は言葉通り、致命傷を与えない。あくまでも戦う意欲、戦意だけを削っていく。

「はあはあはあ……！」

「もうやめよう。君の勝ちはもうないよ。降参してよ。…お願いだよ。」

彼は、沙神は語りかけてきた。どこまでも優しい口調で…。

「やめっ…。やめて！これ以上わたしをおかしくしないで！！殺りたいなら殺ってください！！……もう……。」

わたしはもう限界だった。相手はわたしを殺せる力を充分にもっている。なのに…、

「……ダメだよ。僕は誰も殺せない。殺せば僕は僕でなくなる……だから……。」

「……ッ！！！あなたがわたしを殺さないのなら、わたしが自分で殺す！」

わたしは腕の刃を心臓のある位置に導いた。

「……ハアアアア！」

「っ！！そんなことやらせない！やらせてたまるもんか！！自ら命を絶つなんて！！」

その気迫に驚いたわたしは彼の方を見た。わたしがみた彼の顔は…。

「な、泣いている？なんで……」

彼の顔はとても哀しそうに泣いていた。

「お願いだ！自分で自分を殺そうなんてしないでくれ！！」

気付いたときには、わたしは沙神悠刀に抱きしめられていた。

「え……………」

わたしは彼に腕をとられていた。わたしに刃が向かないようにするためだろう。

……でも、その刃は彼の身体を深々と突き刺していた。

「離してください！死にますよ、あなた！！」

「離したら、君が死んじやうだろ？」

そんなことのために？わたしを殺さないために？それとも自分の信条のために？

「ねえ、話合おう？勇刀もそれを望んでいるよ。」

彼の身体は真っ赤に染まっていた。呼吸も荒くなっている。

「……わかりました。わかりましたから早く離れてください！あなた死にますよ！？」

「大丈夫だよ……。僕が、沙神悠刀が死んでも……佐神勇刀は死なない。死ぬのは……僕だけでいいんだ。」

「何を言ってるのですか？あなた言ってることが、支離滅裂じゃない……………」

いつの間にかわたしは泣いていた。さっきまで殺そうとしていた相手なのに、わたしは泣いていた。

「ははは……。君は何を思い詰めていたんだい？」

「な、なに……を……い……な……り？」

「言わなくても解るよ。夜神『桜』さん？」

「っ！??」

なぜわたしの名前を……？いやそれよりも……。

「思い詰めること……なんて、あ……ぐす……ませ……。」

なんで彼はわたしの心がわかるのだろうか……？

「ふふふ……。嘘をつ……ても……、わ……る……よ。」

彼から血の気が引いていくのがわかる。沙神悠刀が、死んでしま……う……？

「い……や。うう……し、死なないで……。」

なぜかそんなことを言っていた。

「……きず…つ…て…ゴメンね…。さ…くちゃん。」
「ッ！…！？」

さくちゃん！？どうして、沙神悠刀がその呼び名を知っているの
だろうか…？

その呼び名はわたしが小さい頃、近所のお兄さんがわたしを呼ぶ
ときに使っていたあだ名。そのお兄さんは死んでしまったけど……。

「ゆーにーちゃん！」

「あつ！さくちゃん。また遊びに来たのかい？」

「うん！…！そうだよ！…！」

ゆーにーちゃんは近所に住む大学生だった。いつも優しく、一緒
に遊んでくれるお兄ちゃんだった。

そしてなにより、決して命を無駄にしなかった。

「命は大切なものなんだよ。とっても大切だから、むやみになん
でも殺しちゃダメなんだよ。」

それがゆーにーちゃんの口癖だった。

わたしはそんなゆーにーちゃんが大好きだった。

……でもゆーにーちゃんはわたしを助ける為に死んでしまった。

わたしが川で足を滑らせて落ちてしまった時だ。

雨上がりで、増水していて流れが速いのと、まだ泳ぐことを知ら
なかったために、わたしは溺れてしまった。とても苦しくて、息が
出来なくて、恐かった…。死んじやうって思った。

「さくちゃん！…！」

ザブンッ！！

その後どこからか噂を聞き付けたのか町の人達が集まっていた。
わたしは町の人達に介抱されて一命を取り留めた。

でもゆーにーちゃんは流れに吞まれて、そのまま死んでしまった。

そんなゆーにーちゃんが使っていたあだ名を、なんで沙神悠刀が知っているのだろう……。

「……もしかして、ゆーにーちゃん……？」

わずかだが悠刀の首が上下に動いた。

「い……のち……は……いせつ……よ。……だから……忘……な……で……ね。」

かすれかすれだが、わたしには悠刀の言ったことがわかった。

『命は大切なものなんだよ。だからそれを忘れないでね。』

確かにそう聞こえた。そしてあの時と同じように、ゆーにーちゃんはわたしを助けて死んでしまった……。わたしのせいで、二度も死んでしまった。わたしが替わりに死ねばよかったのに……。

最期に聞こえたのは、『また会えて嬉しかった。』という台詞だった。

「ど、どうして泣いてるんだよ？」

「うわああああー!!」

困ったな……。俺が目を覚ますと既にこうだった。

なんとか泣き止んでもらわないと……、そうだ！死んでしまったア二キが使っていたあやし言葉をつかえば……。

「あー、その……」

「うっ……うっ……」

「なにがあつたが知らないけど、顔をあげて？な。」

確かこんな台詞だったっけ？

「生きてる間には辛いことだってある。だけど自分の命が本当に大切だと思っていれば……、少しだけ楽になれるよ。命を感じることは

力になるから……。」

そう言つと腕の中の彼女は更に泣き出した……。ゆーにーちゃん。
ありがとう。と言いながら……。

四章　狂気

「……………ひまだなあ……………」

鼻につく薬品の匂い。目の前に広がる白い天井。無機質な部屋。白衣に身を包んだ人達が忙しそうに働いている。

…そう、ここは病院の中だ。そして佐神勇刀こと俺は、入院している。

…なんでかって？それは……

「……はあ。複雑骨折に出血多量。オマケに熱か……。……ああ動きたーい……。」

という訳だ。

そんな訳で俺は今、全身をギブスで包囲されている。全く動けない状態だ。

「……ああ、なにもできないのは辛いぜ。学校が恋しいな……。」

めんどくさい学校でも、ここまで暇だと行きたくなるとは。人間って不思議だな。

「ていうか、学校もう終わってるな……。誰かこないかな……。」

ガチャリ。

噂をすればなんとやら、とはよくいったものだ。さっそく誰かきたぞ。阿神とかな？

「おーい。生きてるか？佐神い？」

「……なんだ、おまえか。大城。」

「なんだとは心外だなあ。せっかく見舞いにきてやったのに。」

…まあ暇は潰れるからいいか。

「どうも。ありがとさん。」

大城は驚いた顔をしている。なんていう顔だ。

「お、おまえが俺に礼を言うなんて……。」

「……どういう意味だよ。」

大城は、へへと笑いそのままの意味だ、と言ってきた。失礼な奴だな。

その後大城と他愛もない話を続けた。話していると時間はあっという間にすぎた。

「……ツと、もうこんな時間か。」

壁に掛かっている時計をみると5時だった。

たしかこの病院、見舞いは5時半までだったな。

「じゃあな。佐神。」

「ああ。またこいよ。」

おう。と言いながら大城は病室を後にした。

「……暇だなあ……。」

大城が帰ってすぐ俺は言った。話し相手がないのはかなり空しいなと感じていた。

コンコン。

ん？誰だろう。看護師さんか？

「どうぞー。」

ガチャリ。

「……どうも。佐神先輩……。」

「！や、夜神……？」

やってきたのは、俺を殺そうとしていた、夜神だった。

「御心配なく。もうあなたを殺す気はありません。」

「へっ！？」

なんとも素っ頓狂な声を出してしまった。殺す気はない、だと？本当か？

「わたしは、もう誰も殺しません。…それを言いに来ただけです。」

「……そうか……。…なんかその台詞、アニキを思い出すな……。」
ぴくっ。

「アニキ……？佐神先輩。その人の名前は……？」

えっ？なんでアニキの名前が気になるんだ？

「えーと……。なんでそんな事を……？」

素直に聞いてみた。

「そんなこと、どうでもいいのです。はやく名前を教えてください。」

「うう。すごい剣幕……。可愛い顔が台なしじゃないか。」

「……しかし、どうしてアニキの名前を知りたがるんだ？」

「別に教えてもいいけど、その前に俺を殺そうとした理由を教えてください。」

「アニキのことを知りたがる訳も聞きたいが、俺が一番気になってる、『俺を殺そうとした理由』が知りたかった。」

「教えてくれないか。夜神桜。」

「……いいでしょう。解りました。理由を説明します。」

「やったね交渉成功だ。さて俺を殺そうとした理由はなんなんだろうか？」

「佐神先輩を殺そうとした理由は……」

「……………」

「たがみ 躲神家が我等夜神家に、佐神勇刀抹殺の依頼をしてきたからです。」

「」

「はあ！？躲神家？躲神家って、俺らと同じ退魔士一族の……？」

「躲神家とは、沙神家と同じ、退魔士の力を代々受け継いでいる退魔士の一族だ。」

「規模は沙神家と同じくらい大きい……って、今の俺ん家は小さいけど。」

「しかし、なぜそんな躲神家が俺を狙うんだ？沙神家が邪魔になつたのか？」

「俺の記憶では沙神家は、阿神家以外の一族とは比較的友好的に付き合っていたのだが……。」

「そうです。その躲神家です。依頼された理由は詳しくは解りませんが、なんでも、沙神の若いのが許せない！ということらしいです。」

「……………」

全く心当たりがない。躲神家に命を狙われる理由に…。

「わたしが知っているのはそれだけです。さあ、はやくあなたの兄の名前を教えてください。さあ。」

「……………えっ？あ、ああ。名前は沙神悠刀っていうんだ。読み方は俺と同じなんだが、ゆうっていう字が勇気の勇じゃなく、悠久の悠なんだ。…まあ、それがアニキの名前だ。もう死んじやったけどな。」

「……………そうですか。ありがとうございます。…ではわたしはこれで……………」

何か確信めいた顔を夜神はした。が、すぐに元に戻った。そして夜神が病室から出ようとする。

「待てよ。夜神。」

俺は夜神を呼び止めた。

「また来てくれよ？今度はアニキの話をしてやるから。な？」
そんな事を言っていた自分がいた。

「……………考えておきます。」

ボタン。

そうして夜神は帰っていった。

「……………暇だなあ……………」

夜神が帰って数分がたった。やっぱり暇になった。

でも流石にもう誰もこないだろう。既に5時15分だ。面会時間も、もう終わりだ。

コンコン。

……………つて来たよ。

「はい。どうぞ」

ガチャリ。

「あ、あの……………佐神君……………具合は……………どう……………」

「!?! た、田神さん!?! なんでここに?」

俺は意味が解らなかった。俺が散々迷惑をかけた田神さんが、見舞いに来てくれた...のか?

「あ...あの...迷惑...だった?」

そんな訳はない。大城曰く、可憐な妖精なのだ。そんなお方が見舞いに来てくれたのだ。うれしに決まっている。

「そ、そんなことないよ!! 迷惑だなんて...。ていうか、俺の方が田神さんに多大な迷惑をかけてるし...。」

実際そうだ。いきなり手を握ったりしてしまったのだ。

どうとも思っていない男に...。迷惑この上ないだろう。

「そ、そんな...こと...ない...よ...。逆に...うれ...し...。」

ん...。なんか最後の方、聞き取れなかったけど...

でもどうやら、そんなに迷惑かけてるわけじゃないようだ。ほっ。

安心した...

「ところで田神さん。俺の見舞いに来てくれたの?」

「..... (こくん) ...」

頷いてくれた。

...でもなんで顔が赤いんだろ? この部屋暑いのかな? 確かにもう六月も一週間で終わりだから、気温も上がっているはずだ。きっとそのせいだろうな。

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

沈黙。

あの... なにか喋ってほしいのですが...

「...あ、あの...。」

「は、はい!?!」

びっくりした...! 急に喋らないでよ。あれ? 俺さっきまで言うてることが...。まあいいか。

「……………お、お大事に……………」

「えっ？は、はい。」

元々背の低い田神さんはさらに小さくなっていた。
なにか、悪いことしたのかな……………？俺。

「…じゃあね…。佐神君……………」

田神さんが病室からでようとしている。

「あつ。田神さん！」

ビクンと反応した田神さんは俺に顔を向けた。

「…な……………なに？」

「よかつたら、また来てくれない？あつ！よかつたら、でいいから。
嫌ならもう来なくてもいいから。とりあえず、今日はありがとう。」

「……………（こくん）」

パタン。

驚いた顔をした後、頷いて田神さんは帰っていった。

…なんか、やっぱり田神さん…可愛いな…。

……………はっ！俺は何を考えているんだ！？

……………三日後……………

「……………暇だなあ……………」

今日の面会時間はとうに過ぎてしまった。

今日は誰も来なかった。みんな忙しいのだろう。

そういえばさっき来た医者が検査をした時…

「凄い回復力だ…。骨がもう完治している。これなら明日には退院
出来るよ。」

と言っていた。まあ丈夫さだけが俺の取り柄だからな。

しかし、それにしても…

「だあー！…暇だ。テレビみてえよあ……………」

今の時間はダ〇ンタウ〇DXをみている時間だ。ああ、みたいな
……………。

コンコン。

ん？今ノックの音がしたような…。

コンコン。

やっぱりノックの音だ。まあ看護師さんだろうな。きっと。

「開いてますよ。」

ガチャリ。

「！！！！」

入って来た訪問者に俺は驚いた。何故なら入って来たのは、看護士さんではなく……。

「た、田神…さん？」

可憐な妖精、田神さんがそこにいたのだ……。

突然の訪問者、可憐な妖精田神さんが現れた。

当然俺は驚いた。もう既に面会時間は過ぎている。それに病院自体営業（？）は終わっているはず…。

……なんで田神さんが？

「こんばんは。佐神君。」

「あ、ああ。こんばんは、田神さん。ど、どうやって入ったの？」

「…佐神君…。」

「な、なに？」

「屋上にいこ？ここじゃ都合が悪いから…。」

俺は彼女の言っている事がよく理解できなかった。

…都合が悪い？どういう事だろうか？

「ついてきて？佐神君。」

考える暇もなく、うっとうしいギブスから開放されている俺は彼女についていった。

病院の屋上は外見と同じように、床が真っ白だった。

月明かりが綺麗だった。それはもう人が狂いそうになるぐらい綺麗

麗な月だった。

「綺麗な月だね。佐神君。」

「うん。そうだね……」

なんだろう。田神さんからくる違和感は……？なにか不思議な感じがする。

それがなにかは解らないけど……。

「ところで田神さん。どうやって俺の病室まできたんだい？」

えっ？という顔をしている田神さんがいる。しかしそれも一瞬のことだった。いつもの愛らしい顔に戻ると、いきなり……

俺に抱き着いてきた。

俺の思考は混乱した。なにがおきたかわからない状態だ。今の状態を理解するのに、三秒ぐらいかかった。

「た、田神さん！？」

「……………」

なにかをつぶやいている。もしかして、告白ってやつか……？でもそんな期待もことごとく打ち破られた。

彼女の口から『しょうかん』という言葉をきいて……。

ドン……！！

気付いた時には、俺は田神さん突き飛ばしていた。

「痛いなあ……。佐神君。なにをするの？フフフ。」

ゾクッ！

な、なんだ？この背筋を襲う寒気は？というか、彼女は本当に田神さんなのか？

「き、君はだれだ！？」

俺の前にいる少女は、妖しい笑みをみせた。

「誰って？私は田神美香よ。佐神君。」

「嘘だ！俺の知っている田神さんはそんな恐い人じゃない！！それに今のお前からは明らかな殺意を感じる！！」

俺は言い切った。確信はないが、そうだと思った。

「フッフ……。アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

!!!

!!!

突然少女は笑った。まさか本当に田神さんじゃないのか!?

「ハハハ……。鋭いわね。確かに今の私は田神美香じゃないわ。今の私は……。」

すつ。と腕を前にだし、次の言葉をだす。

「退魔士一族の一人。躲神舞。佐神勇刀、お前を殺しにきた。」

「な！？ 躲神家だと！？ なんで俺を狙うんだよ！ 別に俺、悪いことしてないだろ！？」

「問答無用！召喚！封魔刀、大三元！」

少女が前に出していた手に、ニメートルはある大剣が握られた。あからさまにバランスが悪いが、少女は気にせずに大剣を振ってくる。

「くっ！召喚！封魔刀、霊魔刀！！」

大剣を細身の刀身で受け止められなかった。

「アハハハ！どうしたの？女の子の振るう剣が受け止められないの？この雑魚があ！！」

バキン！！！！

「し、しまった!？」

あろうことか、俺は刀を弾き飛ばされてしまった。

「アハハハ！死ねえ！死ねえ！死ねえ！死ねえ！死ねえ！死ねえ！死ねえ！死ねえ！死ねえ！死ねえ！」

めちゃくちゃに大剣を振り回しながら俺に向かって来た。俺は逃げることにした。

しかし……

「っ！！！結界が……！！！」

「アハハハ！！大三元の能力、中！！必中の念がこもっているこの能力は相手に確実にダメージを与えられる！風の刃は何処までもあなたを追いかける！！アハハハハハハ！！さあ！おとなしく殺されなさい！！」

そんなの反則だろ！！何処まで追いかけるなんて！！それにあいつの様子あれは……。

「く、狂っている！！」

「狂っているう！？アハハハハハハ！！！！そうよ！！私は狂っているのよ！！アハハハ！！」

ダメだ！なにを言っても通用しない！躲神を止めるには殺さないといけないのか！？

……でも躲神は田神さんだろう。先程の様子を見る限り十中八九はそうだ。つまり躲神を殺す。ということは田神さんも殺す。ということじゃないのか！？

もしそうなら、俺は躲神を殺せない！なんとかして田神美香を救わなければ！

「死ぬのが嫌なら逃げ惑いなさい！ホラア！！」

ブオン！！

ビュオンツ！！

振るった大剣から風の刃が飛び出る。俺はそれを受け止めようと刀を構えた。しかし……！

ズバンツ！！

「う、ウワアアアアアアア！！」

風の刃は刀とぶつからず、俺の身体を切り刻んだ。俺の身体が肉片が飛び散り、血が吹き出る。鮮血が屋上の白い床を支配した。

そして……、薄れゆく意識の中で、俺が見たのものは……。

泣きながら俺にすがってくる、可憐な妖精『田神美香』の姿だった……。

……深い闇の中……。吞まれていく意識……。

薄目の先に見えるのは、漆黒の闇と……。真紅の血……。何処までいっても……深い闇の中……。

……俺は……生きてるのだろうか？

目を覚ますと、真つ赤な太陽が俺を照らしていた。

ここは……。ああ、そういや、なにか刃物のような物で切り刻まれた記憶がある……。

「……！！そうだ！！確か俺は躲神舞の攻撃で……！」

「私がどうかしたって？佐神勇刀君？フフフ……。」

「……ワアアアア……？た、躲神舞……！！？」

いきなり現れた少女の顔に俺は驚いた。と、同時に猛烈な痛みが身体を走った。

「ぐわあ……！いてえ……！痛すぎるよ！なんだよコレ……！」

「佐神、あんたタフね。あんなにぐちゃぐちゃに切り刻まれたのに、痛いですむなんて。」

「いてえ……。つてやっぱ俺、切り刻まれたの！？夢じゃなかったの……！」

「アハハハ。あんたアホね。痛みを感じちゃ夢じゃないじゃない。」

むっ。たしかにそうだが……。アホっていうな。アホって……。へこむよ？案外。つとそれより……

「お前、本当に躲神舞か？」

躲神舞であろう少女は、変な物を見る目でこちらをみてきた。

「何言ってるの？躲神舞に決まっているじゃない。」

そんな馬鹿な…。あの時の躲神舞とはまるで違う、何と言つか…。

狂った殺意は全く感じずに逆に好意を感じる。

「お前。もう俺を殺さないのか？」

躲神は、えっ？とした顔をした。

「殺されたいの？」

「いやいや！俺は生きたいです！！」

「冗談よ。あんた殺すと、美香がうるさいもの。それに、あんたなかなかいい根性してるしね。私もあんたを気に入ったし。」

アハハと躲神は笑った。あの時のような寒気を感じる笑みではなく、どこか和む笑みで。

「ところであんた。身体大丈夫？」

大丈夫な訳がなかった。少し身体を動かただけで、全身に雷が走ったかのような激痛が走る程だ。

「まっ、大丈夫な訳ないか。私殺す気で風の刃だし。」

「……………なんですと？本当に殺す気だったのか？こいつ？」

「ところで、もう足崩していい？」

「へっ？」

ふにふに。

こ、この感触は……………！！まさしく『ひざ枕』！！

何と言っことだ…。まさか俺が母親以外にひざ枕をされているとは…。

ふにふに。

あっ。やわらかあい。

「……………やっぱ殺そうか？佐神。」

「すみません。調子乗ってました。許してください。許してください。」

そう言い、立ち上がろうとしたが…

「いてえ……………」

なにぶん身体から激痛を感じているのだ。立ち上がれる訳がなか

った。

「すみません。立てません。許してください。許してください。」

「しょうがないなあ。このままするか。」

「ヤレヤレといった顔で躲神は言った。

「召喚。封魔刀、大三元。」

「躲神の手に例の大剣が…、って!!」

「何する気だよ! やっぱり殺す気か!？」

「白^{ハク}!」

「ザクン!!」

「俺の身体にでかい刀身が刺さった…？」

「い、痛………くない?？」

「痛みなど全くなかった。いや、それよりも身体が軽くなった気がする。」

「へへへ。大三元の白。この能力は、身体を真つ白に治療する能力。あんたの傷は全部治ったよ。佐神。」

「確かにさっきまで痛かった身体が、嘘のように動く。」

「フフフ。じゃあね、佐神。また今度…。」

「………は?」

「そう言つと、躲神は大剣をしまい、カクンと首を落としてしまった。が、すぐに…」

「さ、佐神君…。」

「へっ? た、田神さん?」

「…うん。私は田神美香。佐神君と同じクラスの田神美香だよ。」

「なにか懐かしい感じがする。全てを癒すような可憐さ…。思わず見とれてしまう、……が、今の状況に気付き

「ああ!! すぐにどくよ!! ゴメン! 田神さん!」

「立ち上がろうとしたが、俺の頭は小さな手に押さえられた。

「……? 田神さん?」

「………いて……。」

「え?」

「もう少し……このままでいて？佐神君。」

「！！？」

このまま、ということはひざ枕のまま、ということだろうか！？
まさか俺に気があるんじゃない？

……まあまてよく考える。

これはただの昨夜の罪滅ぼしかもしれない。

つまり、田神さんは俺にひざ枕を好きでしているのではなく、
『そんなにしたくない』けどひざ枕をしているのじゃないのか？

ああ、また田神さんに迷惑をかけてしまった。

田神さんも嫌だろうな……。こんなトラブルの原因を嫌々ひざ枕しているなんて……。

「あのね？佐神君。」

考えていると、田神さんが声をかけてきた。

「私ね、人格が二つあるの。田神美香と躲神舞、っていう二つの人格が……。」

「二つの人格……。」

俺の中であの時から引つ掛かっていた疑問があっさり解決された。
でも、もう一つ疑問があった。

「やっぱり、そうだったんだ。そういえば田神さん、なんで俺は命を狙われるんだ？」

「……！そ、それは……。」

「それはわしが教えてやろう。ボウズ。」

突然後ろから声が響く。

「……！おじいさま！」

「へ？おじいさま？」

なんと現れたのは田神さんの祖父らしい。見た感じ、がっちりとした老人だ。

「佐神のボウズよ。お前の命を狙った理由は……、ってなに我が孫娘がひざ枕をボウズにしとるんじゃないかあ！！！！？」

「ひっ！？」

「や、やめて！おじいさま！！」

その後の話をしよう。

まず俺の命を狙った理由。

どうやら俺が田神さんを泣かした（？）ことについてひどく怒ったらしい。

かわいい孫娘を泣かした罪は重い！ということで、わざわざ夜神家にまで俺の抹殺を頼んだぐらいだ、かなりの溺愛っぷりだ…。

確かそのあと田神さんの

『おじいさまなんて大嫌い！！』

という一言で、じじいは石になった。

……まあ俺の命を狙った理由はそんなところだった。

そしてその後どうなったか、というと……。

「やるわね、美香の奴。おじいを石にするなんて。」

躲神舞がでてきたのだ。躲神は俺と向かい合うと指をこちらに向け

「とにかく、佐神！」

「は、はい！」

ちなみに俺はひざ枕から開放されていた。あのじじいが払いのけやがったのだ。

……まあ田神さんは嫌がっていたようだったし…、このほうがよかったのかな？

「これからも、私と田神美香をよろしくね！」

と言ってきた。しかしその時の躲神の顔は反則だった。普段の田神さんからは見られないような眩しい笑顔を向けられたのだ。

躲神舞…。恐ろしい子…！

ちなみに俺は無事退院することができた。躲神の大三元のおかげで、以前より調子が良くなった気もするし。

とりあえず俺は、狂った躲神舞と戦ってはいけないと、身を以って知った。

あの時は本当恐かった。…あつ、思い出したら涙出て来た。

「ただいま。」

そして今俺は家の玄関の中へ入った。

「あら？ 勇刀、もう退院できたの？」

そついえば阿神がいたな。忘れてた、すっかり。

「ああ。まあな。とりあえず俺、着替えてくるわ。」

そつ、言い残し俺は自室へ入った。

そつだ、久々に押し入れに隠してあるアレを観るか。病院じゃあ全く刺激が………たくさん有ったが、まあいい！ えーと確かこの辺に………！？！？

「な、ない！？」

何と言つことだ！ 俺の秘蔵コレクションが、ない！！ 一体どうして！？ ……………ま、まさか！？

ガチャッ！

「残念♪そこにあつたかわしい代物だけは全て処分したわよ♪」
俺は今すぐにでも狂いそうだった。

五章　〱　兆候　〱

「ろっこおゝゝおろおしにいゝゝ、さあゝそおっおゝとゝゝ」

ご機嫌な俺の歌は風呂場で、高らかに響いている。

ちなみに俺は大の阪神ファンだ。今日は阪神が試合に勝ってくれてルンルン気分になっている。

「ペナントレースもそろそろ中盤だな。阪神ファイトゝ！」

くどいようだが今は七月間近の六月下旬だ。学校もあと一月もせずに夏休みだ。

とまあ、俺はご機嫌な訳だがあいつは違っていた。

「うるさい！！勇刀！お風呂で六甲おろしを歌うな！！」

扉ごしに阿神の声が響く。

……いや、別に阿神が阪神嫌いな訳ではない。逆にコテコテの虎っ娘だ。

ではなぜ阿神がご機嫌ナナメかと言うと……。

「だから、悪いって言うてるじゃん！阿神い！」

俺がなにをしたって？それは話すと長くなるが……。

… 数時間前

「風呂　〱　風呂　〱」

俺は阪神戦が始まるまえに風呂にいきこうとした。そして、脱衣所に入ると、先客が既にいたのだ。

まあこの場合、家にいるのは俺と阿神で、俺以外の先客といえば阿神な訳で……。

俺は阿神の生まれたときの姿を見てしまった訳で……………。

という訳だ。

我ながらとんでもない失態を犯してしまったと思う。
当然俺は阿神にボコボコにされた。今でも傷が痛む。

「許してくれよ、阿神！あれは不可抗力なんだ。」

「うるさい！絶対に許さないから！！」

頑なに俺を許そうとしない。少しムツとくる時もあるが俺が悪いから、阿神を責めることも出来ない。

そこで俺は阿神の機嫌をとろうと冗談を言ってみた。

「なあ阿神？一緒に入らないか？風呂。」

「な、なななな何を！？いきなり！！」

「いや……、本気にすんなよ……。冗談だよ……。」

その後阿神から全く相手にされなくなった……。あれ？

阿神が全く相手にしてくれないので俺は散歩に行くことにした。
今夜は月がくつきりとみえる。雲一つない夜空だ。

「……そうだ。公園でのんびりするか。ここから近いし。」
しかし俺は知るよしもなかった。この後のことに……。

「今日は月が綺麗だね。舞？」

（そうね。……なんか、あいつのこと思い出すね。佐神のこと。）

「な、なんでそこで佐神君が出てくるの！？」

（あの時の夜もこんな月だったしね。……それに私と佐神が初めてあった日に似てるしね。）

「舞。あなたもしかして、佐神君のこと……？」

（さあ？どうだろうね？）

「~~~~~。」

今、夜の歩道を歩いているのは田神美香である。

綺麗な月に誘われて外にでてきたのだ。

（ねえ美香。これからどこ行くの？もう帰るの？）

「舞が行きたいところに行こうよ。」

そう言つと田神美香から躲神舞へと替わつた。

「じゃあ、とりあえず公園にでも行こうかな。」

（公園？なんで？）

田神は不思議に思つたが躲神に任せた以上仕方ないか、とも思つた。

しかし彼女等は気付いていなかった。この後過激なことになるというのを……。

「……綺麗……。」

夜神はポソつとつぶやいた。

今見ている月があまりにも綺麗だからついつい声にだしてしまつた。

「何か、いいことが起こりそう。」

夜神は外に出た。後ろで結んだポニーテールが揺れる。

彼女がポニーテールにするのは、珍しいことだった。いつもは髪を下ろしたスタイルで行動しているのだ。

（…そういえば、ゆーにーちゃん、わたしのポニーテール見てかわいって、褒めてくれたっけ。）

昔をしみじみと思い出す。思い出す度に懐かしさが込み上げる。

そしてふと、彼女は思い出した。

（確かゆーにーちゃんとよく遊んだ公園があつたわね…。いつてみようか、な……。）

彼女は今は亡き人、沙神悠刀との思い出の場所。公園へと向かつた。

しかし彼女は気付かなかつた。この後、大変なことが起こるとい

うことに…………。

「全く……勇刀の奴。……あたしを馬鹿にして。……はあ。」

阿神は窓に身体を預けて夜空を見ていた。雲一つない夜空を……

「……綺麗な月。……勇刀どこにいったのかな？……探しに……行こうかな。」

阿神は佐神が出て行ったことに、少し罪悪感を覚えていた。

「普通出ていくのはあたしでしょう……？なんであんなが出ていくのよ……。」

阿神は急に佐神が恋しくなった。しかしそんな気持ちに本人は気付かない。ただの罪悪感からくる負い目だと思い込んでいた。

「……優し過ぎよ……。絶対……。」

しょうがない、と付けたし阿神は外に出た。

……月明かりが自らを照らす。どこかで勇刀もこの月を見ているのだろうか？

「……あいつ……。どこへ行ったのかな？」

阿神はこんな時、勇刀ならどこへ行くか考えた。そして……。

「……あの公園……。かしらね。あいつならありえそうね。」

そして阿神は公園へと向かった。

しかし彼女は気付かなかった。この後の悲劇に…………。

「みえないものをみようとして、望遠鏡をのぞきこんだ……」

阿神に無視されていたことなど忘れて、俺はルンルン気分之歌を歌っていた。軽い足取りで公園へと向かっていた。

「静寂を切り裂いて、いくつもの声が……ってあれ？あれは……。」

俺は目の前にいるでかい影に見覚えがあった。

あの影は……

「おお？大城か？」

「ん？おお！？佐神い！何してんだ？こんな時間に？」

でかい影の正体は大城だった。なにやら大きな荷物を持っている。
「ちよい散歩にな。お前こそ何してんだ？そんなでかい荷物もって
…。」

俺は大城の持っている荷物を指差した。

「これか？これはめちゃくちゃいいものだ。」

大城は胸をはって言い切った。いいもの…か。気になるな。

「なあ、なにがはいってんだよ？」

「教えて欲しいか？教えて欲しいか？佐神い。」

なんかうざい。

「いいからおしえろ。」

「実は、……………なんだ。」

「なに！？……………なのか？いいなあ、それ。」

「安心しろお前にも、やるって。ほら。」

大城は荷物から……………を取り出した。

「大事に使えよ？じゃあな。」

大城は俺に……………を渡すと、帰っていった。

「ふはは、やった。大城よ、ありがとう！」

俺は大城から貰った、筋ケシ（筋肉マン消しゴム）を大事にポツ
ケに突っ込んだ。そしてまた、俺は公園に向かって歩きだした。

俺の家からだいたい10分も歩けば、公園につく。腕時計をみれば既に10時を過ぎている。

「日本の未来は…………と、公園についたか。」

ひと昔前に流行った歌を歌いながら、俺は目的地に到着した。
目的地の公園は、滑り台とブランコと砂場、鉄棒があるぐらいだ。
あとはひろーい運動場が存在している。その、ひろーい運動場で

あんなことが起こるなんて、俺は考えもしなかった。

何もすることがなく、ただボー然と夜空を眺めていた。

雲一つない空。まばゆい光を放つ月。

そんな空を見ていたら、近くで足音が聞こえた。

「誰だ、こんな時間に公園にくる物好きは？」

言ってから、俺もそうか。と思った。そんなことを考えていると声を掛けられた。

「うわぁ？佐神じゃん！奇遇だね、こんなところで会うなんて！」

「げえっ！？躲神！！」

声の主は躲神舞だった。俺が声を上げると不機嫌そうに、頬を膨らませた。

「なに？私と会つの嫌だったって訳？殺ろうかな、こいつ。」

「すみません。許して下さい！」

「冗談に決まってるでしょ？佐神。」

全く質の悪い冗談だ。でも微妙に目がマジだったような…。気のせい。

そのまま立っているのも、なんなので俺達はベンチに座った。

「なあ、佐神。」

「なんだ？躲神？」

「あんた、私を呼ぶときは呼び捨てなのに、なんで美香のときはさん付けなわけ？」

私は気になったことを聞いた。先程5分程度話したが（もちろん美香もくわえて）、なぜか佐神は私と美香で違う呼び方で呼ぶのか。さん付けならさん付け。呼び捨てなら呼び捨てで呼んでほしい。さすがに、ちゃん付けは恥ずかしいけど。

「えっ？なんでだろ？」

佐神は困っているようだ。首を傾げる動作をしている。……なんか、いい…。

「二人はどうやって呼んでほしいんだ？それに従うよ。」

……どうしようか？私は美香に聞いてみることにした。

（私はいまのままで…。佐神君と話が出来ただけで、うれしいし。）

（…あんた、なかなかストレートに告白したわね。！そうだ、ね！美香……。）

私と美香の話し合いは終わった。結論は……。

「じゃあ、私たちを名前で呼びなさい！下の名前で。」

「な、なんだってえー！！！！」

佐神はかなり戸惑っていきそうだ。さあどうするのかな？

「さ、はやく呼んでみてよ！」

「わかった……。じゃあ…、これでいいか？舞。」

かあー。

なんだろう？急に身体が熱くなってきた…。ど、どうしてだろう？

「どうした？舞。」

「ご、ゴメン！美香に替わる！！」

「へ？」

私はなんか居づらくなった。なんでかはわからないけど…。美香ガンバ！

「えーと、田神さん？」

「…う、うん。」

舞が急に入れ替わると言い残し、私と入れ替わった。

佐神君に舞って呼ばれて照れてるのかな？…でも佐神君、私のこと名前で呼んでくれないのかな？

「さ、佐神君？わ、私のことは名前で……その…呼ばないの？」

ダメっ！どうしても佐神君の前じゃ上手く話せない。

…佐神君、私のこと、ぼそぼそはつきりしない奴って思ってるのかな……？

「え？ああ。じゃあ話の続きをしようか？……み、美香？」

プシュー！！

私は意識を失った…。

わたしが公園につくと、ベンチに佐神先輩と女の子が座っていた。なにかを話していたと思うけど、急に女の子が倒れてしまった。わたしは佐神先輩のところへ走りよった。

「……佐神先輩。何をしているんですか？女の子に危害を加えるなんて…。」

「げえっ！？夜神！！」

なにをそんなに驚いているのか…。それほどわたしに会いたくなかったのだろうか。

「何したんですか？言わないなら警察呼びますよ？」

佐神先輩は、驚いた顔をしてわたしに事情を話してくれた。

…この女の子、先輩だったの？てつきり中学生かと思った…。

それにしてもこの女の子が躲神家の人だなんて…。そのほうが驚きだ。

「それで佐神先輩。躲神先輩となにをしていたのですか？名前を呼ぶだけで人が倒れる訳ありません。正直にいつてください。警察呼びますよ。」

わたしは佐神先輩の言っていることが信じられなかった。

「だから本当だって！なら試してみるか？」

そういうと佐神先輩はわたしの目をみてきた。……なぜかゆーにーちゃんを思い出すな。なんでだろう？兄弟だからだろうか？

そんなことを考えていると、ますます佐神先輩がゆーにーちゃんに見えてきた。

……どうして体が熱いんだろう。

「……………さくら。って、どうした！？夜神い！？」
そのままわたしは意識を失ってしまった。

勇刀を探して公園までやってきた。公園に入ってすぐに勇刀を見つけた。

…でも女の人と一緒にベンチに座っていた。

あたしは隠れるようにその様子を見ていた。美人って感じのポニテールの女の人と話している。

……あーゆーの好きなんだろうか？まさかポニテール萌えとか…？まさかね。

その後もあたしは二人のやり取りを見ていた。声は聞こえないけど、様子はよく伺える。

「なに話しているのよ？むー、聞こえない。」

ぶつぶつ文句を言ってみたけど、すぐに様子見を続けた。すると突然…。

女の人が倒れた？

あたしはすぐに勇刀のところへかけよった。

「勇刀！何してるの！？」

「げえっ！？阿神！！」

驚くのはわかるけど驚きすぎるんじゃない？そんなに会いたくなかったのかな？

……当然といえば当然かな。勇刀も悪いけど、無視し続けたあたしも悪いし…。

でも今はそれより…

「何があつたの！？勇刀！」

「わわわ！話すから首をシェイクするなあー！」

勇刀から話を聞いた。どうやら名前を呼んだだけで倒れてしまったそうだが、あたしは信じられなかった。

「あんた嘘下手ね。もっといい嘘つけないの？」

あたしは毒づいた。別に羨ましがっている訳じゃない。決して！でも名前で呼んで貰ったんだ。あたしなんかからかわれる時しか、勇刀はあたしを名前で呼ばない。なんでだろう？幼なじみでもあるのに…。

「……証拠みせてよ、勇刀。証拠。それであたしに謝ってみてよ。」
「ええ！？」

勇刀は驚いたようだ。でもすぐに平静を取り戻したのか、こちらをみてきた。ていうか、本当に謝るの？

ちよ、ちよっとまって。なんか勇刀の目、少し綺麗に見えるし。

……なんか、かつこ……。

「ごほん。……すまなかつたな。華奈？」

あたしにとって満足で最高な謝罪であたしは意識を失った。

一人取り残された俺は、倒れている三人をほっとく訳にはいかず、三人ともベンチに座らせた。

相変わらず意識を失ったままだ。

「なんで三人とも名前を呼ぶだけで倒れるんだよ？貧血か？」

俺は全く訳がわからなかった。

しかし、この後に起こったことはあまりにも恐ろしかった。それだけは、俺でもわかった。

ひっそりとしてしまった公園で、一人月をながめる俺。
なんかたった数十分でどっと疲れた。

そのせいかな。俺は忍び寄る影に気付かなかった。

「グオオオオオオ!!」

「げえっ!? 妖魔!!」

響き渡る重低音と共に俺は……

「グフウ!?」

ぶっ飛ばされた。この衝撃、まさしくオーガ!?

「ウオオオオオ!!」

吹っ飛んでいる俺は公園の記念樹にぶち当たった。更にオーガは俺に追撃をしようと近付いてきている。

ここで少し説明しよう。オーガは二メートルを軽々越えていて、力は二十馬力をも圧倒する。普段は山奥でひっそりと暮らしている妖魔だ。遭難した人々はオーガに捕らえられて食い殺されてしまうという。

……ありがたい説明どうも……。誰だか知らないが。

しかしどうして山奥で暮らしているオーガが、こんな街中に? っ てそんなことを考えている場合じゃないな。俺喰われるかも……。

「ウオオオオオ!!」

「っっ!!」

すばやく間合いを詰め、拳を振りかぶるオーガ。

俺は観念して目を閉じた。霊魔刀なんかだすひまがない。

……ああ、俺の人生も短かったな。仕事上死と隣り合わせだしな ……。

そして、オーガは佐神に痛恨の一撃を繰り出した。

のだが、それはなかった。

なぜなら……オーガの体に何発もの銃弾が浴びせられたからだ。

「勇刀！！大丈夫！？」

「立てますか？佐神先輩。」

「このお！よくも佐神を痛めつけたな！覚悟しなよ！！」

（さ、佐神君をいじめるな〜！）

先程まで倒れていた三人（四人）の少女たちの、猛攻撃が始まったのだ。

佐神は安堵の息をもらすと、意識を失ってしまった。

「ウオオオオオ！！」

オーガが攻撃をしかける。狙いは、大剣を担いでいる躲神だ。

「チィ！私に狙いをつけたか！！」

ドガン！バコン！

オーガめ、私にそんな攻撃が当たると思っているのか！大振りすぎだ！

「つてりゃあ！！」

この大三元ならオーガなんて……

ガキン！！

「！！な、え！？私の大三元をはじいた？」

「グオオオ！！」

「キヤアアア！！」

（ま、舞！！）

そ、そんな……。私がこんな簡単に……？

「！！躲神先輩！」

「！グオオオオオ！！」

オーガは今度はわたしに狙いを変えたようだ。オーガは大きく腕を突き出し、パンチとは言えないような攻撃を繰り返してきた。

「甘いです。せいっ!!」

氷連爪をまとい、オーガの攻撃をよけて反撃を試みる。

ガガガガガ!!

「くっ!やはり効きませんか。」

後ろから阿神先輩が支援してくれている。

しかし、銃弾での攻撃はオーガにとって痛いものではないはず。

それはわたしの攻撃も同じ。

「ウオオオオオ!!」

「!!!!」

ドスン!!

「アアアアア!?!」

オーガの攻撃は、隙をみせたわたしの身体に重い攻撃が入った。

「な!?二人とも、大丈夫!?!」

「.....。;」

返事は返ってこない。死んでいることはないと思う。

あの二人だつて退魔士。おそらく大丈夫だろう。

「もう!なんで封魔銃が効かないのよ!?!」

あたしの封魔銃、滅光銃デスライトニングが全く通用しない。せいぜい傷をつける

のが精一杯。.....勝てないよ。こんなの。

「起きてよ!起きなさいよ!!勇刀!!」

勇刀を呼ぶ。でも勇刀はいまだに気を失っているまま。

「グオオオオオ!!」

「!こ、来ないで!」

ダンダンダンダンダンダンダン.....!!!

いくら撃つてもオーガはとまらない。そしてあたしの目の前には

.....。

カシャン。

誰かに呼ばれたような……？ううん……。

「いてて、オーガめ。って、みんな！？っ！？阿神！！」

俺が見たものは、オーガの一撃を喰らい銃を落とした、阿神の姿だった。

「！！こっちにくるか！」

オーガはその巨体に 似合わず、素早い動きで俺に近付く。召喚する暇がない！

ん？阿神の銃が足元まで転がってきている。使い慣れてない武器だけど、背に腹はかえられんな。

俺はそう思い、銃を、滅光銃をにぎった。その瞬間だった…。

ドクン！ドクンドクンドクン……！！

「ウワアア！！な、なんだ！？頭が痛い！！！」

「グオオオオオオ！！」

「アアアアアアア！！！！……………」
殺す。」

パン。

「グ、オオオオオオ！！？」

「お前を……殺す。」

鋭い眼光を光らせ、滅光銃をもった佐神勇刀は、まるで別人だった。

冷酷に、しなやかに動く。そして、今まで効かなかった滅光銃の銃弾で、オーガを怯ませていた。

パンパンパンパン。

「グオオオオオオ！！」

苦しむオーガ。さっきまでとは違い、かなりのダメージを負っている。

「見える。……そこだ。死ね。」

パン。

「ウオオオオオ……！」

そしてあつという間にオーガは封魔された。それと同時に…

ズキン！！

「くっ！頭が……。」

佐神勇刀に頭痛が襲う。とてつもなく、苦しそうだ。そして佐神勇刀は再び意識を失った。

「……………きて……………おき……………うと……………」

「うつ……。」

目が覚めると、俺は布団の中にいた。

「あれ？ここは？」

目の前に広がる白い天井。……………まさか。

「病院よ。勇刀。」

声のするほうに顔をむける。

「……………阿神。おはよ……………」

「……………ばか。もう夕方よ。」

「えっ？俺そんなに寝てたのか？えーと、コンバンワ。」

阿神は、はあ、とため息をして病室の外にでていった。おーいまつてくれよ。

阿神が病室から出た後再び扉が開いた。

「佐神君、大丈夫？」

「わあ！田神さん？」

「どうも、佐神先輩。」

「わあ！夜神？」

「ちーす。佐神い。」

「……………なんだ大城？」

なんかいろいろきたなあ。見舞いか、これは？…嬉しいねえ、俺結構人徳あるんだな。こんなに来てくれるなんて。

「いやあ、みんなありがとう。ただ一日寝てただけなのに、見舞いに来るなんて。」

俺のその一言で空気が凍った。

「佐神君？今何月かわかる？」

田神さんが怪訝そうにきいてきた。当然俺は思っていることをいった。

「六月でしょ？田神さん。」

「いいえ。佐神先輩、今はもう七月です。六月は五日前に過ぎました。」

「な、なんだってえ！！」

驚きの事実には俺は、絶叫してしまった。

病室の外にでた阿神は誰かと話していた。三十代後半の男とだ。

「とうとう狂が目覚めたかな。」

「……みたいですな。」

「勇刀が君の銃を持った瞬間覚醒したらしいな。怪我の功名だな。」

「……………」

「沙神悠刀は死んでしまった。勇刀のなかで…な。あれは残念な事故だった。」

「……………」

「まあいい。じゃ阿神帝みかどの娘。勇刀の、いや、狂の監視をたのんだぞ。」

「……はい。沙神鷹尋……………」

（しかし、剣技が得意だった狂が銃で目覚めるとは…………果たして…）

沙神鷹尋は嫌な予感を覚えた。

六章　誕生

なぜだか、学校がすごく久しく感じる。それもそのはずか…ここ最近の俺の生活は……

入院↓三日たつ↓退院↓意識飛ぶ↓入院↓十日ぐらいたつ↓退院。という生活だ。入院しすぎだろ。

さすがに体力が落ちるな。走れないよ、こんなに。

……どうして走っているかって？それは…

「はあ…つはあ…。な、なんで、俺がつ追われるんだ？」

俺は今学校の中をある奴に追われている。

なぜに昼休みで体力を使わんといかんのだ。全く休ませてくれよ。俺はそう思った。

そんなことを思っていると、後ろから声が……

「待ちなさい！勇刀！」

「くう！捕まってたまるか！！」

俺は逃げる。阿神華奈から……。

なんで追われているんだろうか？俺が飯を食おうとしたら近付いてきて、嫌な予感がして逃げだして。そんなやりとりの後こうなつて。

つてはやく逃げないと！

そんな時、後ろからくる阿神に気を取られていた俺は、目の前の人物に気付かなかった。

ドーン！！

「うわあ！？」

「キヤア！？」

派手にぶつかってしまったようだ。

…ってなんか聞き覚えのある可憐な声だな。……まさか！？

「いたゝい！あう！？佐神君！？」

田神さんだ。やってしまった！またまた田神さんに迷惑をかけてしまった。

「わああ！田神さん、大丈夫！？」

「あ……。う、うん。私は大丈夫だよ。舞は？」

（まあ大丈夫だよ。）

「…………あれ？ちよつと待て。今声が？」

「あれ？ま、舞！？」

田神さんは困惑している。それもそうだろう、俺だってびっくりしている。なぜなら……。

俺の身体に二つ目の魂を感じるからだ。

（もしもーし！なんで私が佐神の中にいるの！？）

「俺にきくなよ！」

「えっ！？舞、佐神君の中にいるの！？」

「どうやらそうらしい。」

一体どうしたのか、精神が入れ代わるなんていうのは聞いたことがあるが、片方にだけ精神が移るなんて聞いたことがない。どうしたものか……。

（まあ、いいじゃん。別に私は困らないし。）

なんてことを言っているんだ。みる田神さんも困っているぞ。下向いてるじゃないか。

「…………いいな、舞。」

「え？なにか言った？田神さん。」

「なんでもないよ！！」

「……………??」

（ニヤニヤ。）

「なに笑ってんだ？躲神。」

(なんでも♪)

「??????」

なんなんだ一体。田神さんも躲神も少しおかしいぞ。
いや俺が落ち着きすぎているのか？

どうせすぐには戻らないと思うのだから慌てたってしょうがない
だろう。

「勇刀っ！！」

しまった。奴を忘れてた。

でも、俺は昼休み終了チャイムまで逃げる事ができたけどね！

へとへとな身体で俺は五限目を受けた。疲れていたから、寝て過
ごそうとしたのだが……。

(起きろ！佐神！！)

「わかってるよ……。はあ。」

こんな調子で躲神に起こされ続けている。

「よし。じゃこの問題を……佐神。といてみる。」

「へ？は、はい！」

なんだよ、もう。えーと……

「Xに216の二乗分の23を代入して……、そうして角aのsin53°をつかって……、答えは13・952です。」

「ん。正解だ。」

(……佐神。案外頭いいんだね。)

「知らなかったのか？俺は学年で上位3位をキープしてんだぞ。」

(そんな、まさか美香を越えているなんて……。美香でも23位が限界なのにな。)

確か俺らの学年は300人いたな。へえ田神さんやつぱり頭いいんだな。

(……めちゃくちゃ嫌味に聞こえる。こいつ多分悪気ないんだろな。
知らないところで敵をつくるタイプだな。)

その後の授業はスムーズに進んだ。と思う。ああ眠い。

キンコンカン♪

いつもは憎いメロディが幸せのメロディに聞こえる。そして俺はルンルン気分だ。

「せまる〜、シヨッカー〜！」

（なんでそんな古い歌、歌ってるんだよ？）

「いいじゃないか。俺が好きなんだし。」

俺は現在下校中だ。ルンルン♪

（別の歌にしてよ〜。）

しょうがない奴だ。

「夢であるように〜、なんども〜、ねがったよ。うつむいたまま〜、

」

（…………。はっ！）

『躲神の心のなか』（なんだよ？あいつの歌声？めちやくちゃいいじゃん。ていうかラブソングっぽい歌わないでよ！）

俺は久しく歌ってなかったゲーソン（ゲームソング）を歌った。

ああ、いい歌詞だな。

その後あつという間に家に着いた。

さてと、田神さんと会う約束をしている（話し合いをするために約束をした）俺はささっと着替えて、ささっと待ち合わせ場所へ。

ハハハ、デートみたいだな♪

（佐神。ずいぶんうれしそうだね？）

「そうか？まあ理由はどうであれ、女の子と待ち合わせってというのは憧れだったんだよ。」

（へえ。意外と純粋だね？）

意外ってなんだよ。失礼な。俺はいつでも純粋だ。

という訳で、俺はルンルン気分で待ち合わせ場所の公園に向かっている。

「とぎすまされた爪をたて〜」

（なあ佐神。今更だけど、高校生になってうたいながら歩くっていうのはどうかと思うんだけど。）

「いいじゃないか♪別にい♪」

（……う……なんか反則だ、その反応。）

「なにかいった？ 躲神？」

（なななな、なんでもない！）

「???」

俺なんか悪いこといったか？

という訳で待ち合わせ場所に到着した俺は田神さんを待っていた。待ち合わせ場所は、オーガが現れたあの公園だ。まあ気にしないけどね。

「さ、佐神君、お待たせ……。」

程なく待っていると田神さんがやってきた。

田神さんの服装はいつもより可憐さが増す格好だった。

なんというか…、官能的というか、イメージ的には妖精というか子悪魔というか…。だっていつもみたいな清纯タイプなロングスカートをはいている彼女が、大胆なミニスカートをはいているんだぞ。おにーさんびつくりだ！

（美香めえ！ 抜け駆けする気！？）

「どうした？ 躲神。なにか言っ……。」

（なななななな、なんでもない！！）

「???」

「へへへ。」

という訳で、話し合いをするため、俺は久しくぶりに喫茶店にい

った。

……よく考えたら俺ん家か、田神さん家でよかったのでは……？わざわざ喫茶店までいなくても。

うーん、なんでだろ？

……まあいいか。さて、いつこの状態が改善されるのか。はやい改善を俺は望むぞ。

……まあ不謹慎だと思いが悪くはないと思っているけど……。この状態。退屈しないしな。

あれ？なにか忘れている気がする……。

放課後の学校

「勇刀！どこいったの！！全く……。……あたし、どうすればいいのかな。……勇刀、何で逃げるの？」

（しばらく会えなくなるのに。）

彼女の手の中にはお菓子の包みが握られていた。

カラン。

グラスの中の氷が音を立てる。先程までブラックコーヒーが入っていたものだ。

俺は専らコーヒーはブラック派で砂糖もミルクも入れないバリバリのブラック派だ。

対する田神さんはカフェ・オレ派だった。そういえば俺がコーヒーを飲んでいると、田神さんは珍しいのか俺のグラスをまじまじみていたな。

「田神さん、飲んでみる？」

とグラスを差し出したな、俺。田神さん真っ赤になってたな。

まあそれもそうだろう。カフェ・オレ派の田神さんがブラックコーヒーに挑戦するんだ。緊張するだろう。

しかも、甘いカフェ・オレの後にブラックコーヒーだ。おそらくすさまじい苦みが襲うだろうな。

「えん！？にがい！」

やっぱり。ていうかこれ俺のせいかな？躲神だつて、
(う~~~~。)

って唸っていたしな。二人ともごめんなさい。

あ、ちなみにストローはついてあったよ。

さてどうしたものか。この状態をなおすにはどうすれば？その解決策は案外はやくみつかった。

「あのね？その状態は、簡単に元に戻るんだつて。」

「…だつて？誰から聞いたの？その話。」

「おじいさまに。」

ああ、あの溺愛じじいか。俺はそんなことを思いながら、重ねて質問した。

「簡単につてどうやつて？」

「三日間過ごすだけらしいの。そうしたら勝手に精神が戻ってくるそうなの。」

「え？そうなの！？じゃあ深く考えることじゃなかったんだ。」

ほっ、と胸を撫で下ろす。三日間なんてあつという間。それで元に戻るんだ。苦労はしなさそうだな。

その後は他愛もない話をして別れることになった。もちろん躲神は依然俺の中にいる。俺は三日で元に戻るときいて、ルンルン気分だ。

「はぁーちゃー！へっちゃらー！~~~~」

（何でアニメソングかな！？）

「い、いやか？」

（うん…。歌うなら別のにして…。）

なんで急にしおらしくなったんだ？まあいいか。さて、どうしようか…。

「いまあ、はるがきてえきみいは、きれいになった♪」

（……………）

どうやら納得してくれたようだな。贅沢を言えばなんか感想がほしかったとこだが…。なんでずっと黙り込んでんだ？

さて家についたのはいいが、問題がある。それは阿神がいることだ。学校の奴らの数人（大城とか）しか知らない事実を躲神は受け入れられるのか？

まあなんとかなるか。

ガラ。

「ただいま。」

返事は返ってこない。阿神はいないのか？ん？置き手紙が…。

『しばらく帰りません。』

「なんだこりゃ？どういうことだ。」

（両親のこと？）

……そういうことにしようか。

「そうみたいだな。」

（じゃあ佐神と二人きり……。）

「肉体は一つだけだな。」

（はあ、私に身体があれば…。あんなことやこんなことができるのに…。）

「…何する気だよ？俺を殺る気か？」

（そそそ、そんなわけないよ！佐神とやろうだなんて！）

「日本語おかしいぞ？躲神。俺と何を殺る気だよ？」

(そんなこと、言えない……。)
「????」

なんだよ。一体。

時刻は7時になった。よし!!
ぴつ。

『さあ阪神対中日。三回表が終わり、中日の攻撃です。』
「今日は中日とか。」

(佐神、阪神ファンなの?)

「そうだけど。躲神、中日ファンか?」

(いや、……ヤクルト……。)

「へえー。そうなんだ?」

(あれ、怒らないんだ?)

「なんで怒る必要があるんだよ?」

『あーと!!大きい!のびるのびる!ホームラン!中日、一点先制
!』

「あー!なにやってんだ!?くそ!!!」

(……… 案外、野球好きなんだな。)

その後、阪神の粘りもむなしく中日に負けてしまった。でも阪神の粘りはすごかったな!うんうん。

という訳で野球中継が終わり俺は風呂にいくとしている。

「風呂」風呂」

(まて!佐神、風呂にいくのか?)

「?そうだけど。……あ……。」

しまった。今俺の中には躲神が、女の子がいるんだった。風呂にいくということは、裸になるわけで……。

「どうしようか?」

(……………)

「躲神？おい。」

(……………わ、私は、大丈夫…だよ？)

まあ風呂にはいきたいしな。少し恥ずかしいけどいいか。

カポーン。

「はあ……。気持ちいい。」

俺は現在湯舟に浸かっている。気持ちいいね、本当に。一体誰が風呂なんて考えたんだろう。考えた人は天才だな。全く。

俺は風呂の偉大な力によって、ルンルン気分だ。

「ババンバ、バンバンバン♪」

風呂の定番はやっぱりこれだろう。ドリフも天才だな。

(……………)

『躲神の心の中』(はやく出てよー！変な気持ちになるよー！……はう……)

「いい湯だな〜♪」

ふうー。気持ちよくて、ついつい長風呂になっちゃったな。一時間も入っていたのか。さあて、風呂の後はやっぱり……。

キュポン！

「これだよな！」

俺は腰に手をあて、コーヒー牛乳をのむ。えっ？ブラック派じゃなかったのかって？それはそれだよ。風呂上がりは特別なさ！

「ゴキユゴキユゴキユ！プハー！んまい！」

そういえば躲神、風呂の途中で何も言わなくなったな。のぼせたのか？そうなら大丈夫かな？

ていうか精神だけがのぼせるのかな？

そんなどうでもいいことを俺は考えた。

『躲神の心の中』（ダメ……。見てしまった……。佐神のアレを……。
ああ！恥ずかしい！！話なんて出来そうにない！悪いのは佐神だ。
うん、そう！）

躲神は一人で奮闘していた。

「いよいよか……。」

（うん。そうだね。いよいよだね……。）

なにがいよいよだつて？それはな……。

「あれから三日経った。今日でこの状態からさよならだな。」

そう、今日は躲神が俺の中から開放される日なのだ。躲神にはかなり苦勞をかけたな……。

後日にでもなにかしてやろうかな？

今日で私は佐神の中から元の美香の中に戻る。

……やっぱり寂しいな。楽しかったし、たくさん話もできたし。

……アレも見てしまったし。

はあ、寂しいな。

（佐神。私から開放されて、うれしいでしょ？）

佐神にはいろいろ苦勞かけたしね。私がいらない方がいいに決まってるよね。

「うれしい……。か。俺はそうは思わないけどなあ。躲神といると楽しかったよ。何気に。」

うれしいことを言ってくれる。そうかあ、楽しかったかあ。

「ていうか、うれしいのは躲神だろ？俺からやっと開放されるんだから。」

（えっ？そんなことは……。ない。）

私は素直に言った。本当に名残惜しいから。

「別に俺にあわせなくていいのに…。それよか躲神、案外かわいいこと言うんだな。」

かわいい…。？私が？そんな訳無い…。私は自分でいうほどガサツな性格だし。

（ふふふ。お世辞でもうれしいよ？佐神。）

私にかわいいなんて言うのは、後にも先にも佐神だけだろうね。ありがと、佐神。

さて俺達は今、田神さん家にいる。どうやらじじいの力を借りないとダメらしい。

…なんか腹立つのはなんでだろう？

「よし。では今から儀式を始める。」

じじいと言う。儀式？大袈裟だな。そんな大層なものかね。

「ボウズ。主のおかげで舞に新たな身体を授けることができるわい。」

「（！？！？）」

なんだと？躲神に新しい身体？そんなことできるのか…。

「これはな、舞が美香から離れることが必要だった。まさかこんなに早く機会がくるとはな。」

俺はじじいの言っていることが理解できなかった。

「まあ深く考えることではない。…いくぞい。舞。」

そいうとじじいの身体からすさまじい光が放たれる。

「うおっ！？まぶし！！」

「きええええ！！」

じじいが叫んだ瞬間、俺の身体から何かが抜ける感じがした。

うおーん…。

まさにそんな感じの音が聞こえた。そして…。

俺の目の前に裸の少女が現れていた。

その少女はまるで田神さんそっくりだった。違うところといえば、髪に青みがかかっていることと、背が高いことぐらいだ。

「ふう。儀式は成功じゃ。ボウズ、礼をいうぞい。」

「……………」

俺は目の前で起こったことに、まるでついていけなかった。

「ボウズ。今日はひとまず家に帰れ。説明はまたの機会にする。後のことはわしに任しとけ。」

「…わかった。今日は帰るよ。」

俺は渋谷家に帰ることにした。

翌日……。

「ふわぁぁ……。朝か。」

俺はいつもどおりに起床した。

その後はいつものように着替えて、飯をつくって食って、学校へむかった。

阿神はいまだ家に帰ってこない。どこにいったんだろうか。

「おう！佐神、おはよー！」

「大城か…、おはよ。」

「知ってるか？今日ウチのクラス転入生がくるんだとよ！」

「へえー。そうなのか。また転入生か。」

多いな、阿神がきてから一月经ってないぞ。あんまり興味ないけどな。

「しかも女の子らしいぞ。俺結構楽しみにしてんだ。」

「あっそう。…大城。」

「なんだ？」

「納豆臭いと相手にされないぞ。」

大城は慌てて口をおさえていた。

「はい、みなさん♪席についてえ♪大事なお知らせがあります♪」

担任、新山千春が意気揚々に教室にいるクラスメイトに告げる。

「なんと、今日は、」

「転入生がくるんだろ！？先生！」

大城め。また横槍いれやがったな。よし、殴ろう。

「ピキッ。さすが大城君♪情報が早いわね♪」

やっぱり新山先生は素晴らしい。横槍をものともしない。って前も言っただな。

「どうぞ♪躲神舞さんです♪」

へー躲神さんっていう人なんだ………って

「な、なんだってえー！？」

「佐神、うるさいよ？驚きすぎだよ。」

教室に入ってきたのは、まごうことなき昨日身体を手に入れた、躲神舞だった。

「知り合いか？あの二人？」

「佐神君も隅におけないわね。」

「佐神、俺はうらやましいぞ！」

「妹にしたい！いや、姉でもいい！」

口々にクラスの奴らが騒ぎ始める。知り合いつていうか、仕事仲間？

「なんか、田神ちゃんと同じ名前だし♪二人とも姉妹？♪」

「あ、あの…そんな感じです。」

田神さんこまってるな。一体どうなるんだ？いや、どうなったんだ？俺の周りには？

……放課後。

「びつくりしたよ。まさかウチのクラスに移ってくるなんて…。」

「へへへ。おじいが手を回してくれたんだ。実は。」

あのじじい、一体どんな権力ちからをもってたんだ？

「舞。ちよつと…。」

「なに？美香。」

そそくさと田神さんと躲神が俺から離れていく。

「昨日聞けなかったけど、佐神君の家どうだった？」

「別に普通だったよ。たいてい野球中継みてただけだけど。」

「お、お風呂はどうしたの？」

「えっ…！……………」

「…見たの？」

「……うん……………」

「……そうなの…。」

「おおーい。二人で何話てんだ？」

「「ななななな、なんでもないよ！！」」

おお、さすが双子（？）息ピッタリだ。

あつそうだ。

「そついえば躲神。身体があつたら何かしたいって、いったよな。俺と何を殺るんだ？ちよつとぶつそうううう！？」

ぶしゅー！！

田神さんと躲神は、顔を真っ赤にして倒れてしまった。

ヤバイ！二人揃って熱中症か！？大変だ！すぐに処置しないと！！

俺は二人を俺ん家まで運んだ。女の子って軽いな。一人でも二人担げるぞ。本当軽いな。

という訳で、俺はなるべく部屋を涼しくして二人を布団に寝かし

ている。

……二人とも寝顔がかわいいな。

「うーん。」

おっ。躲神が目を覚ましたな。

「大丈夫か？ 躲神。」

「へっ？……ここは？」

「俺ん家だよ。二人とも倒れて、大変だったよ。」

田神さんはまだねているな。まあ無理は身体に毒だしね。

あっそうだ。

「躲神。」

「な、なに？」

「俺の中にいた時にいろいろ迷惑かけたからな。何かお詫びするよ。」

「い、いいよ！ そんなの、気にしなくて。」

「いいて。何か言いなよ。遠慮せずに。」

「……じゃあさ、今度二人でどこか行こうよ？ 私と佐神でさ。」

あれ？ そんなんでいいのか。

「別に遠慮しなくていいんだぜ？ そんなのつまないだろ？ 躲神が。」

俺とどこかに行っても、面白くないと思うんだが。

「そ、そんなことないよ！ 私はそれで満足だよ。」

「そうか？ じゃ次の日曜日ぐらいだな。」

「……約束だよ？」

「安心しろ。俺は、紙と記録しか破らないから。」

「……うん……、ありがと。」

ところでなんで躲神はさっきから顔が真っ赤なんだろう？ まだ熱が抜けてないのか？ まあ冷たい緑茶でもだしとくか。

養生しろよ？ 二人とも。

七章 試練

「なあじしい。」

「なんじゃ、ボウズ。」

「あの時、何もないとこから躲神の身体がでてきたよな？あれ、どこからでたんだ？」

「…は？なにいつとるんじゃ？ボウズ。」

「いや、だから…。」

「あれはボウズと美香の情報から出来たものじゃよ。しかし、情報だけでは物質ができないのじゃ。だから、わしが力をつかったのだ。…つまりは、物質にある情報を作り出すのではなく、情報にある物質を作り出すため、じゃ。わしの寿命の一部をつかってな。」

「…どういうことだ？じじいの寿命…？」

「んなことはどうでもよい。…ボウズよ。」

「な、なんだ？改まって。」

「美香と舞をたのんだぞ。」

「…！！…頭あげろよ！全く、どういう風の吹き回しだよ？」

「そういうことだ。頼んだぞ、佐神勇刀。」

「……わかったよ。…自信はないけどな。」

七月十日 学校にて

俺のクラスに躲神が加わり、男性陣はテンションが急上昇だ。一部の女性陣にも人気がある。

いつも躲神の周りは人がいる。

…俺か？俺は輪の中に加わってない。変な誤解が広がりかけた為である。田神さんに迷惑かけて、なおも躲神に迷惑をかけるわけにはいかない。

何が迷惑って、俺と付き合っているなんて噂がたつてみる。めちやくちや躲神が困るだろ。どうでもいい男と付き合っているっていう噂がたつのは。

「佐神いゝ。ぶっちゃけ躲神ちゃんとういう関係なんだ？」

ほらきた。ここから噂が広がるのはアウトだからな。相手が大城だから大丈夫だと思うけど。

「ただの仕事仲間だよ。躲神だってそう思ってるよ。」

「ふーん。そうなのか。付き合ってないんだ。」

「どうしたんだよ？……まさかお前……！」

「いや、それはないぞ。俺には、隣のクラスの薫ちゃんがいるからな！」

そうだった……。こいつ彼女がいたな。たしか、はがみ かおる覇神薫っていう娘だった。大城を気にいるとは、かなり物好きだよな。隣のクラスか。ウチがA組だからな、B組か……。

ていうか夜神は諦めたのか。

「まっ噂が本当か確認したかったただだよ。」

………なんだよ。一体。

キンコーンカーン♪

はあああ……。補修つてめんどくさいなあ。確かに休み過ぎていたのは悪いと思うけど……。不可抗力なのに。

「……まあ、そろそろテストだしな。しょうがないか。」

自分に言い聞かせる。じゃないとやってられないよ……。ああ日もトップリと暮れているな。真っ暗だ。

ふと俺は、そばにある公園（やっぱりオーガが出て来た所）に目をやった。

「……あれ？あそこにいるのは田神さん？」

なんと田神さんが公園のひろーい運動場の傍のベンチに腰掛けている。

…何してるんだろ？こんな時間に…。

「田神さん？何してるの？」

「あ…。佐神君…。来ちゃったね。とうとう…。」
とうとう来ちゃった？どういふ事だろうか。

「ごめんなさい。佐神君。」

「…………へ？」

呆ける俺。そして構える田神さん。何を構えているんだ？

「召喚！封魔陣、魔光輪！」

「！！？…ふ、封魔陣！？」

なんと田神さんは、封魔陣という技を繰り出してきた。

封魔陣とは、主に身体のどこかに魔法陣のような紋章を張り、その紋から魔法のようなものを出せる退魔士の力の一つだ。

封魔陣を扱う退魔士は案外多いらしい。ただ俺の周りが特殊なだけだ。

という訳で、

「うわああ！？た、田神さん？なんでこんなこと…………」

ビュオオ！！

「のわああ！！」

田神さんが使う封魔陣は光の輪を扱う紋だ。イメージ的には、クリ○ンの気○斬だ。こちらをしつこく狙ってくる。

「ちよつと！田神さん！！」

「ごめんなさい！ごめんなさい！佐神君、これも皆の為だから！」

訳のわからない事言わないでよー！田神さん！俺死んじやうよ！

「どうする？おじい。」

「そっじゃな…。この躲神家特製狂化剤を使うか。これならボウズも闘わざるを得ないじゃろ。」

「病院の時私が使った奴ね。ていうかおじいちゃんが勝手に使っただけだ。」

木陰から佐神と田神を見守っている影が。躲神とその祖父だ。

「美香に向かつて、ホイ。」

ブンツ！カツ！

攻撃の手が止まる。

「いったい！？ってあれ？」

ほわわーん…。

投げられたものから煙りがでる。田神はそれを全て吸い込んでしまった。

「……………佐神君。」

なんだ？あの煙りは！？しかも田神さん全部吸っちゃったよ。大丈夫なのか？

「あゝ。田神さん？」

恐る恐る聞いてみる。

ギンツ！！

「ひい！？」

今田神さんの目が……、紅く光った！！？

「へへへ。佐神君？死んじゃダメだよ？」

ビュオビュオビュオビュオビュオ。

光の輪が沢山……………ありすぎ！！

「田神さん！？一体何なんだよお！？」

「ほらあゝ死んじゃうよ？佐神君？へへへ。」

光の輪がまだまだ出てくる。出て来ては、田神さんの上で浮遊している。

そして…！

ブワアアア！！

一斉に光の輪が襲い掛かる。

ドガアアア！！

砂埃があがる。

「へへへ。佐神君、死んじやったかなあ？」

「ええい！死んでたまるかあ！！」

砂埃から俺は姿を現した。ていうか本当に危なかった！

「田神さん……。俺、ちよつと怒ったよ？」

ギンツ！！！！

悪いけど反撃開始。

「なあ、おじい。美香やバイと思うよ。」

「うん。わしもそんな気がしてきた。」

「どうするの？」

「どうしようかの？」

「佐神止めた方がいいと思うよ。」

「そうじゃな。薬も中途半端に効いてないみたいじゃし。」

影は動き出した。

「田神さん。謝るなら今の内だよ？」

さっきまでの勢いはどこへいったのか、田神は怯えている。

「ご、ごめんなさい！！佐神君！！」

佐神は極上の笑みで言った。

「ゆるさなーい」

「ひゃあああ！！」

少女の叫び声が夜に響く。

その後の話。

俺が気付くと、泣きながらへたりこんでいる田神さんと、必死な

顔で俺を抑えている躲神とじじいがいた。

俺の手にはハリセンが握られていた。ちなみにただのハリセンではなく、『封魔刀、突込刀』という殺傷力のない武器。

何をする気だったんだろ？俺。

「これは美香の試練なんじゃ！」

とはじじい談。

「これで晴れて美香も、退魔士一族躲神家の退魔士になったね！」

とは躲神談。

「ごめんなさい佐神君！そういうことなの！私が躲神家の退魔士になるためのテストだったの。佐神君を気絶させるっていう。」

とは田神さん談。

「まあ、ボウズ相手にここまでやったからな。美香、テストは合格じゃ。」

とはまたもやじじい談。

「おめでとう！」

とは俺以外の三人談。

そして……。

俺がハリセン（突込刀）で三人の頭を叩いていたのは言うまでもなかった。

「さあ説明して貰おうか。」

「あの〜佐神君？」

「何？」

「怒ってる？」

「ゼンゼンオコッテナイヨ。」

「ぼ、棒読みでいわないでよ〜。」

「…なるほど。佐神が怒るところなるのか…。」

「案外ボウズも怒るんじやのう。」

「そこの二人！！！」

「「はい!!?」」

「説明して貰おうか?」

「「はい……。」」

俺が聞いた話はこの感じだ。

田神さんの中から躲神がいなくなったことで、自ら戦うことを決意した田神さん。そこで、手頃な奴で力を試してみよう。ということとで俺を狙ったらしい。

「ごめんなさい、佐神君……。」

いくら俺でもこれは許しがたい。仮にも命を狙われた訳であって、あの時の躲神みたいで結構恐かった訳で、……等々。

「……うう……ぐすつ……ご、ごめんひつく……なさい……うっ……。」

……えっ? 田神さんもしかして、泣いてる?

「……ぐすつ……ううっ……ごめんよ……ひつく……佐神……。」

なんで躲神までなくんだよ!?

「ボウズ……。よくもわしの愛娘達を泣かしたな!」

「うわあああ!! 待てじじい!! チェーンソーはなし!! 死ぬって……!!」

「安心せい……。峯うちで許してやる。」

あの〜チェーンソーって、両刃がぐるぐる回っているんですよ? 峯うちでも人体切れますよ? チェーンソーって……。

「うわあああああ!!!!」

夜の公園に俺の情けない悲鳴が響いた……。

その頃の田神と躲神は……、

(「(うわああん!! 佐神(君)に嫌われたよ!!!!」)

考えていることは同じなようだ。でも一番泣きたいのは、躲神祖父から逃げる佐神だ。彼はチェーンソーから必死に逃げようと奮闘

している。

七月十三日 放課後

とうとう明日からテストが始まる。放課後に受けた補修のおかげでなんとかテスト範囲まで勉強できた。

ところが明日からテストだというのに阿神は未だ帰ってこない。

さすがに心配する。どこにいったんだよ、一体？

「どうしたの？佐神君。」

「あ、躲神さんと躲神。」

声をかけてきたのは、元田神さんと躲神だ。田神さんはあの一件以来躲神と名乗っている。わざわざ戸籍も変更したらしい。

「ねえ、佐神。いい加減その躲神さんと躲神はやめてよ？」

「えっ？どうするんだ？」

「み、美香とか。」

「ま、舞とか。」

…なんか微妙にデジャブ…。どうしたものか…。

「……まあたしかに、躲神さんと躲神、じゃあ解りにくいしなあ…。」

と俺。

「「じゃあ!？」」

二人は顔を輝かせるが…。

「だが断る。」

「「ど、どうして!？」」

「この佐神の最も好きなことの一つ。それは顔を輝かせて期待している奴に向かってNOと断ってやることにある。」

「「そ、そんな…。」」

二人は泣きそうな顔をしている。ヤバイ！言い過ぎた!？

「じよ、冗談だよ！二人共！最近読んだ漫画の真似をしたただだよ

!?!」

「.....ぶち。」

ぶち？なんだろう、さっきの音は？とそこまで考えてハツとした。
二人の目が.....

「どうしようか？舞。」

と躲神美香さん。声が恐い。

「そうだね.....どうしようか？美香。」

と躲神舞さん。声が恐ろしい。

「そうだ。佐神は学年で三番に入るぐらいの優秀君なんだって。」

「そうなんだ？.....佐神君？」

「は、はい！？」

ヤバイ、俺泣きそう.....

「勉強教えてもらいたいなあ、佐神君？」

「明日テストだしねえ、佐神？」

これ断ると、俺死ぬかも.....

「ゼンゼンイヨ。ナンデモオシエルヨ。」

一つしかない選択肢を俺は選んだ。

「佐神先輩.....」〇〇読んでるんだ。」

夜神はぼつりとつぶやいた。

二人の恐ろしい形相に睨まれた俺は、二人に勉強を教えることになった。

「.....じゃあ俺、なにか飲み物持ってくるから。ゆっくりしててな？」

「.....はい.....」

なんであの二人は嬉しそうなんだ？さっきまで怒っていたのに.....
いいことでもあったのかな？

ボタン。

俺はいろいろ思いながらも部屋をでた。もちろん自分の部屋から、

だぞ。

「……行っただ？」

「……行っただね。」

私たちは顔を見合わず。そして……

「佐神君の部屋広いね。」

「だよ。一人部屋にしては十畳は広すぎだね。」

「佐神君の部屋……えっちなものとかあるのかな？」

「私が入ったときはそんなもの見なかったけど……。気になる。」

私たちは、部屋の中を詮索した。そしてすぐに怪しいものを見つけた。

「舞、なんか沢山本が入ってる箱があるよ！押し入れに。」

「こつちも見つけた。タンスの中にDVDが……。」

私たちは、同時にそれらを取り出した。それらとは……

「……○○○の奇妙な冒険……のコミック全巻？」

「……ジブリ作品のDVD全集？」

ガチャ。

「二人ともおまたせ……。……って、わあああ！……！」

「……！……！」

私たちは、顔を真っ赤にして驚くしかなかった。

数時間後……。

「バイバイ佐神君。」

「さよなら佐神。」

「ああ二人とも、気をつけて帰るんだぞ？」

あの後、いろいろとゴタゴタがあったけど、みたいなもの無事勉強会は終了した。

「「うん」また明日。」

二人が揃って手を振る。俺もあわせて手を振る。明日のテストは頑張れる気がするなあ。

それにしてもよかった。阿神が秘蔵コレクションを処分していて、結果的に阿神に助けられたな。怪我の巧妙だな、まさしく。

「……佐神君、こうゆうのが好きなんだ……。舞には黙っておこう。……私、好きになる人……間違えたのかなあ……。そんなことないよね……、佐神君は素敵な人……。だよね？」
一人自室で悩む躲神美香であった。

カリカリ……カリカリ……。

無機質な音が教室中に響いている。

カリカリ……カリカリ……。

黙々と問題を解いていく。む、難しい……。

キンコンカン♪

「はい、それじゃあ、提出してくださいーい♪」

ああ、やってしまった。今回のテスト難しいな。

放課後……。

テスト期間というのは楽なもんだ。授業が午前中に終わるんだもんな。

それでも俺はテスト勉強で忙しいけど……。

「……はあ……。」

つい溜息が漏れる。

「どうしたの？佐神。」

「なんでもないよ。たが……、舞ちゃん。」

心配そうに俺の顔を見つめているのは、躲神舞だ。別に名前で呼んでいるからって恋人、という仲ではない。

「溜息なんかして…、佐神君、悩み事でもあるの？」

「別に悩みなんてないよ。たが…美香ちゃん。」

今度は躲神美香へ返事をした。とまあそういう訳で『躲神』という苗字を持つものが二人いるため、名前で呼んでいる。というか呼び始めた。

「…二人ともテストはどうだった？」

先程行った、テストの出来を聞いてみた。

「まあまあ…ね。私自分でテストするの初めてだったから緊張したよ。」

「私は…自信はないけど。…出来た方だと思う。」

前者が舞ちゃんの後者が美香ちゃんだ。なるほど二人共、テストは順調みたいだな。

「佐神君はどうだったの？」

「さぞかし優秀な評価でしょうね。」

「今回は駄目だ…。まるで自信がない。」

ハアと溜息をつく。今回のテストはあまり期待できない。…重力加速度の計算ってどうだったっけ？基礎的過ぎて自信ないや。

自信がない。と言った瞬間二人が微笑んだ気がした。

…馬鹿にされているのかな？

「ねえ、佐神。」

「…なに？」

「今日も勉強しに行ってもいいかな？佐神君。」

「えっ？今日も？…俺は構わないけど…。」

「「決まり」」

なんで二人でハモってんだろ？勉強好きなのかな？二人…。

「じゃあ私達は着替えてから行くから。」

「待っててね？佐神君。」

なんで着替える必要が…あっそうか！今はもう夏だからな。汗

をかいた服を替えたいのだろう。

「わかった。じゃあ待ってるよ。」

俺達は解散し、また会う約束を交わしたのだった。

……………夢なら覚めて欲しい。……………どうしてあたしは……………。

「……………勇刀。……………ごめん。……………もう駄目かも……………」

あたしは今、ある部屋に監禁されている。

あたしの目の前には大きな機械がある。なんの機械なのか…あたしには興味がなかった。

興味を示しても、別に何も変わらないとすぐに気付いた。そして今の状況から逃れることも出来ないと思っている。

「華奈。始めるぞ。」

三十代後半に見える男が言う。

「……………はい。沙神鷹尋様……………」

「これが終われば、君を勇刀の所へ返す。安心なさい。」

「……………！？ほ、本当ですか？」

「ああ。本当だ。さあ、この中に入るんだ。」

勇刀に会える……………。この作業が終われば、勇刀の所へ……………。

あたしは、言われるがまま、機械の中に入った。

ピンポン♪

「はい。あつ、いらっしやい。さあ上がって。」

俺の家に躲神姉妹（？）がやってきた。

結構長かったな。解散してから二時間近く経ってるぞ。

まあ二人共来たからいいか。と俺はそれ以上考えるのをやめた。
「それにしても…二人共、凄い格好だな……………」

躲神姉妹の服装は、なかなか綺麗だった。

美香ちゃんは肩にレースみたいなものを纏い、水色のワンピース姿であったが、妙にスカート部分が短い気がしてならない。普通は膝上五センチぐらいは短すぎると思うのだが…。最近はその感じなのか？

そして舞ちゃんは真っ白なシャツに短いジーパン、ニーハイソックスだ。シャツの真ん中に大きくハートが描かれている。派手だよ、それ。しかも後で気付いたけど、後ろにもハートマークがプリントされていた…。

そういえば美香ちゃんのワンピースもハートが小さく刺繍してあったな。

二人共、好きな人でもいるのかな？もしそうなら頑張れ！応援するぞ！俺は。

……………数時間後。

「ふー。そろそろ休憩いれよっか？」

さすがにずっと同じ姿勢を保つのはしんどい。肩も凝る。

「佐神、肩こり？」

どうやら俺が首をコキコキしているのをみてピンときたようだ。

「…まあ、ね。」

「大丈夫？佐神君。」

そんなに心配しなくても…。所詮肩こりだから。

「あつ。何か飲み物だそうか。二人共、何がいい？」

そういえば何も出してなかったな。失礼なことをしてしまった。

「何でもいいよ。」

「私も何でもいいよ。」

「じゃあ、アイスコーヒーでいいかな？」

「…うん。」

俺は台所へコーヒーの準備をしに席を立った。

ボタン。

そして部屋をでた。
もちろん俺の部屋からだよ。

ボタン。

「行ったね。佐神君。」

「そうだね。行ったね。佐神。」

二人は顔を見合わせ……………佐神のベッドに突っ伏した。

「……………」

そのまま二人は動かなくなった。僅かに声が漏れる。

「佐神君の匂いがする……………」

「佐神の匂いがする……………」

はたから見ると、変な二人に見えるが二人は大まじめのようだ。

それほどに、佐神勇刀のことを好いているみたいだ。

…しかし、当の佐神勇刀はそんなことに気付かない。

「……………佐神君って、」

「……………佐神って、」

二人は口を揃えて言った。

「「鈍感過ぎ？」」

「ヘクシ！ヘクシ！うん？夏風邪かなあ？」

のんきにコーヒーを作っている佐神は二度くしゃみをした。

カリカリ……………カリカリ……………。

無機質で乾いた音が教室中に響く。もちろん今日はテスト二日目だ。

しかしどうして今回のテストはこんなに難しいんだ？正岡子規が

生んだ俳句を現代語訳して五つ書けって……そうそう思い出せないよ…。

キンコーンカーン♪

「はい、時間でーす♪提出してくださいーい♪」

………はあ。やってしまった。とりあえず解る範囲で答えたが……。自信ないなあ…。

「……………はあ。」

今日も溜息が漏れる。昨日と同じシチュエーションで…。

違うと言えば躲神姉妹がいないことかな？掃除当番って言ったな、二人共。待たなくていいって言われたし。

「……………赤点の心配はないと思いたい…。」

ぼつりと自分に言い聞かせた。

それにしても昨日は大変だったな……。部屋に戻ったら二人共ベッドで倒れていたから……。その後すぐに家に帰したけど。………びっくりするよ、全く。

昨日のことや、今日のテスト、明日のテストについていろいろ考えた。

それなりに頭が痛い。特に明日のテストは苦手な地理だ。スリランカの首都なんだっけ…。

そんなことを考えながら帰路についていた。その時、俺の目の前に見覚えのある影が見えた。

「……………阿神か？さっきのは？」

見えた影は阿神に見えた。俺はそれが阿神なのかはやく確認したため、走って追い掛けた。

「やっとな帰ってきたのか？」

久しぶりに会うなあ、と思った。本人なら……という条件付きだが。

阿神らしき影は曲がり角をくると曲がった。俺は見失わないようにささつと角を曲がろうとした。

なぜ過去形なのか……。それには理由がある。

角から少し顔を覗かせた時、阿神がこちらを向いていたからだ。ただ単にこちらを向いていたなら問題はなかった。しかし曲がった先にいた阿神は……、

「……どうして封魔銃、ウージ・サブマシンガン速射銃なんか構えているんだ？」
銃口をこちらに向け、銃を構えている姿だった。

俺は考えた。なぜ阿神が銃を向けているのかを。

「……丁寧に結界まで張っている……。」

用意がいいとしか考えられない。まるで最初から俺を殺す気のよう……。

「……何かの間違いだよな？きつと。」

そう考えた。阿神が俺を殺す訳がない。だから俺は顔を出した。
瞬間。

カタタタタ！カタタタタ！カタタタタ！

まるでミシンのような音をあげ、俺を襲う銃弾。

俺は音と同時に顔を引つ込めた。……本気だ！

速射銃もといウージ・サブマシンガンは形が大きく、かなりの連射ができる銃だ。たしかイスラエルとかで使われているんだっけ？
ってそんなことはどうでもいい！……阿神、何を考えているんだ！？

「ふー。お掃除終了。美香そっちはどう？」

「こっちも終わったよ。」

残って掃除をしていた二人は、今それを終わらせたようだ。

「じゃあ帰ろうか？」

「うん。そうだ……！？！？」

「！？！？この感じ！？」

二人は急に顔をしかめた。なにかを感じたようだ。

「強い結界だよ。……それも阿神さんの気配。」

美香が感じとったものは、阿神華奈の気配を纏った結界の存在だった。

それは舞も同じだったらしく、コクつと頷く。

「いつてみたほうがいいわね……。」

舞がそういい、今度は美香が頷く。そして二人は気配のする方へ向かった。

ガキン！！ガシャン！！

阿神の手から銃が落ちる。なぜ銃が落ちたのか……、それは俺が一瞬の隙をつき阿神の手に霊魔刀のみねを当てたためだ。

「っ！？よくも！」

「おい！！阿神、俺だ！佐神勇刀だ！」

俺は阿神に呼び掛けた。きっと何か勘違いをしているだけだろう。だからその勘違いを解決すれば……！

しかし俺の予想は外れていたようだ。それどころか、衝撃的な台詞をきいた。

「……佐神……勇刀……？……なんだ……妖魔じゃなかったのね……。てつきり妖魔につけられていたのかと思った。……ていうかなんであたしの名前を知ってるの？」

はっ？What？なにを言っているんだ？まるで、俺のことを知らないよみたいな台詞は？

「おいおい、まさか俺のことわからないのか？」

馬鹿みたいな質問を試してみた。本当に馬鹿みたいな質問を……。そ

して返ってきた台詞は……。

「わかる訳ないでしょう？初めて会ったんだから。」

「どういうことだ？初めて会った……？ちよつと待ってくれよ。」

「阿神、悪い冗談はやめてくれよ。…心配だったんだぞ？ずっと帰ってこないから。」

「……どういうことよ？……帰ってこない？あたしが？……どこに？」

「…いい加減にしろよ。そんな悪い冗談を言うなよ。」

「さすがに少し腹が立ってきた。冗談にしては質が悪すぎる。」

「……本当にわからないわよ…。あなた、誰かと勘違いしてるんじゃない？」

「………本気で言っているのか？」

「………ええ。本気よ。あたしがここにきたのは、あなたが言ったように帰ってきたんじゃないわ。知り合いのところにいくためよ。…あなたのことじゃないわよ。知り合いって言うのは…。」

「どういうことなんだよ？阿神の言っていることが俺には理解できなかった。」

「……まさか記憶喪失なのか？…だからこんなことを言っているのか？」

その後阿神は、それじゃあね、といい去っていった。俺はふに落ちない気分で帰路についた。

「…？気配が消えた…？美香、気配感じる？」

「うつん…。何も感じない…。どうしてだろう？」

二人の躲神は不思議に思った。先程まで感じていた気配がプツリと途絶えてしまったからだ。

「………多分、佐神君がなんとかしたんだよ。阿神さんと佐神君幼

なじみって言うてたし……。」

「……………それならいいけど……………」

舞はどこかふに落ちない様子で納得をした。

「……………ごめんね勇刀。今のあたしにはこうするしかないの。」

……………誰もわからない。彼女に何が起こっているのか。佐神になにが起こるのか。

そして彼女は後悔している。もう、佐神勇刀と相いれぬ関係になつてしまった。と。

彼女の頬には一筋の水の通り道が浮き出ていた。

カリカリ……………カリカリ……………カリカリ……………。

無機質な鉛筆の音が教室に広がる。そう、今はテスト三日目、最終日だ。三日だけというのは短い気がするけど……………。

それにしても、やっぱり地理は難しい……。イスラエルの首都の座標を書けつて……。どこの宝探しだよ。

キンコンカン♪

「はいい♪みなさん、テストを回収しますよ♪」

ああくそう！またやってしまった。もう駄目だ……。はあ……。

放課後……………。

「はあ……………」

「どうした？佐神。溜息なんかして……。」

俺は今教室の掃除をしている。もちろん一人でなく大城と一緒にだ。

「いや……テストが心配で。」

はあ……。と溜息をさらにこぼす。そんな俺をみて大城は……………。

「気にすんなよ！人間はテストだけでは計れないんだぞ！！」

しかし大城が言っても説得力がない。この前コイツのテストをみたんだが、地理なのに青い山脈と解答欄に書いていた男だ。

青い山脈は歌の題名だ。はだしのげんを読んでみる。卒業式で歌っているから。

とまあ大城は馬鹿だ。そんなやつ言うことはスルーするに限る。「なんだよ。無視か？」
はい無視です。

数分後……。

掃除が終わり、片付けをもすませた俺達は、解散することにした。そんな時、声が掛かる。

「正和。掃除終わった？」

「おお、薫！ああ今終わったぞ！」

薫……まさか覇神薫か……？大城の彼女っていう……。

薫と言われた女の子は背が高く、体育会系といった感じにみえた。バレー部に入っていそうだな……。

ていうか、夜神と少しかぶる。

「じゃあな、佐神！」

「……あ？ああ……。」

本当に付き合っていたんだ。てっきりアイツの妄想かと思っていたのに。

大城は覇神薫と一緒に帰っていった。

「さて、俺も帰るか。」

正直、自分がむなしくなってきた。自分でいうのはなんだが、俺の顔は中の上ぐらいだと思っている。

それに俺だって大城ほどとはいかないが背は高い方だし。……なんで俺はモテないんだろ？

「……中身が駄目なのか？はあ、わからんなあ……。」

なんか自分に自信がなくなってきた。ていうか、たいてい一緒にいる躲神姉妹だって俺のこと、『友達』程度にしかみてないんだろ
うな……。

……男としての魅力がないのか？俺と大城、なにがちがうんだ？
ぶつぶつ……。

俺はやっぱり納得ができなかった。が、そんなことを考えても自分には関係ないことだと思った。

……俺の運命は決まっているからな。

ピシイ！！

「……！！」

気配を感じた。嫌な感じだ。

……この気配、屋上か……？

正直、屋上という場所にいい思い出がない。病院の屋上で舞ちゃ
んに殺されそうになったし。

殺されませんように……。

俺はそんな心配をしながら屋上に向かった。

「やっぱり、思った通りだ。結界がある。」

屋上へつづく階段の手前には、結界が張ってあった。俺は恐る恐る
結界の中にはいった。

結界自体に入るのは容易だ。ただ、出るのは難しい。病院の一件
のように、ね。

ギイイ。

屋上の扉は少しさびていた。そして、広がる屋上をみわたす。そ
こで俺はみた。

「……阿神……。」

ガトリングガン・グレネードランチャー

回連銃と弾薬銃を構えている阿神を……。

ダダダダダダ！！

バン！！ドガン！！

いきなり俺にガトリングとグレネードランチャーの弾が向かってくる。呆氣にとられていた俺は動くことができなかった。

「……ッ！！！！！！」

カンカンカン！！キン！！！！

「……………？あれ？俺……………死んでない……………」

「大丈夫か？佐神君！」

俺の目の前には、短刀をもった一人の男がたっていた。

その男に俺は見覚えがなかった。

「…あんた、誰だ？」

男は言った。

「それは後だ。正義の味方、とでも言っておこうか。」

と、男は冗談まじりで、それでいて真面目な顔で阿神と対峙している。

「勇刀……………」

「！！阿神、俺のことがわかるのか！？」

「ごめんなさい。あの時記憶はちゃんとあったの。あたしは嘘をついたの。」

淡々と、なおかつ哀しみを帯びた声で俺に言う。

「阿神ちゃん。君をそうしているのはだれだ？」

「な、なにを言ってる……………」

俺は男の言ったことが理解できなかった。

「……………あたしが今こうしているのは……………」

阿神は男の問いに答える。

「佐神勇刀を沙神の血に覚醒させるため、勇刀の父親に頼まれたから。」

「なっ？親父にだと!？」

俺はあせった。なぜ親父がでてるんだ。と。

それに沙神の血？どうということだ？

「勇刀。あなたの身体には二つの魂が眠っているの。」

俺の心を読んだのか、阿神は話し始めた。

「一つは沙神悠刀。随分昔に亡くなった沙神の者。でも彼はまた死んでしまったわ。そしてもう一つ。」

俺は阿神の言っていることについていけなかった。理解出来たのは悠刀兄さんの魂が俺の中にあって、その魂が死んでしまった、ということだ。ややこしい話だな。

「沙神^{きょう}狂。あなたの、佐神勇刀のもう一人の人格。狂は封印されているの、あなたの中で。そしてあたしは、狂の封印を解く。」

「ちよっと待ってくれ！」

頭がパンクしそうだ。なんなんだ？一体。

「どうしてその狂、って奴の封印を解くんだ!？」

「それはな、佐神君。」

男が代わりに答える。

「狂は封魔の天才だったからさ。でも君の父は狂を危険視した。幼過ぎたためだ。幼い狂が、人を殺すことを覚えると彼が不憫になる。…そう君の父は判断し、狂を封印したんだ。」

男はまるで昨日起きたことのように話した。

「……詳しいわね。霸神^{はがみけんじ}謙司。」

霸神謙司と言われた男は少し眉をひそめた。

「おっと、ぼくのことを知っているとは。」

「勇刀の父親から聞いたわ。おそらく霸神謙司が出てくるだろうって。」

俺はもう会話に入ることが出来なかった。しばらく黙っていよう。「そうか。ならばぼくがその計画を阻止するのは言うまでもないね。」

短刀を構える覇神。

「邪魔をするなら楽にしてあげるわ。」

ガトリングとグレネードランチャーを消し、拳銃を召喚する阿神。

「佐神君！」

突然名前を呼ばれた。

「は、はい！？」

「君は守りに徹っしろ！いいな！」

タン。

言うが否や覇神は軽やかに地面を蹴り阿神に向かう。

覇神謙司は二十代半ばぐらいの年齢に見えた。少し茶色の髪をしている。白のＴシャツに青のジーンズという格好をしている。それなりに動きやすそうだった。

「無駄よ。」

ダダン！！

阿神の銃が閃光と銃声をだす。覇神はそれに合わせるように阿神の回りをまわりながら接近している。戦い慣れているように見えた。「どこを狙っているんだい？阿神ちゃん。」

覇神は阿神の半径二メートル程度の場所まで近付いていた。

「覇あああ！！」

一気に覇神が距離を詰めた。ものすごく疾い動きだ。しかし阿神はその動きを制した。

持っている銃の他に持っているものがあつたからだ。

「あれは霊魔刀！！？」

阿神は俺がよくつかう霊魔刀を握っていた。

本来、退魔士が召喚するものは召喚する者の力が高ければ高いほど、召喚される武器も多くなる。

俺の使っている霊魔刀は、普通の武器より性能がよく使いやすい。しかしその分、退魔士の力が高くないと召喚できない。

俺は霊魔刀との相性がよかつたらしく、霊魔刀を楽に扱うことが

できる。

阿神は銃士、と言っていた。銃士はその名のとおり銃の扱いに長けている。だがその分、近接武器全般との相性が悪い。

そのため、阿神が霊魔刀を召喚出来る、ということは阿神の力が高い。ということに繋がる。

「……！驚いたよ。阿神ちゃん。まさか君が刀を召喚するとはね。」

覇神は予想外だ。と付けたし短刀を構えなおした。

「覇あああ！！」

覇神は気合いをいれるように叫んだ。そして彼の手にダガーのようなナイフが現れた。

「二刀流がばくの型だ。阿神ちゃん、覚悟するんだ。」

タン。

覇神がまたもや軽やかに動きだす。しかし今度の阿神は、覇神に目もくれなかった。阿神の目線の先には……。

俺がいた。

阿神は俺に狙いを変えたようだ。銃弾が何発も飛んでこようとしている。覇神はしまった！と言っている。

そして阿神の銃の銃口が光った瞬間。

「佐神君を護って！魔光輪！！」

後ろから声がとんできた。

俺の前に見覚えのある光りの皿が現れた。俺が見たときは穴が空いていたが、今日の前にあるのは盾のような形になっている。そしてこの技を使うのは……。

「……美香ちゃん！！それに舞ちゃん！！」

屋上の扉の前には、先に帰っていたであろう躲神姉妹の姿があった。

「二人共、どうして！？」

俺は驚いた。なぜ先に帰ったはずの二人がいるのか、と。

「佐神君の気配が急に消えたから…。私達、ずっと靴ば…ふわっ！」
「と、とにかく！佐神！助太刀するわよ！」

舞ちゃんが美香ちゃんの口をふさぐ。なにをしてるんだ、一体。

「ははは！佐神君、モテモテだなあ！」

覇神は笑っている。ていうか、どこがモテモテだよ？こんなときに冗談はよしてほしい。

「はは…。形勢逆転だな。阿神ちゃん。悪いけど、反撃させてもらうよ！」

覇神は素早く阿神に接近しにいった。

「むぐ、…ぷはあ。さ、佐神君。あの人はだれなの？」

美香ちゃんが聞いてくる。俺は答えようとした。が、俺の声は遮られた。

「正義の味方さ！お嬢さん達！」

覇神が遠くで躲神姉妹に叫んだ。

「ほんとになんなの？あの人。」

「えーと……。」

俺は答えに詰まった。なんて説明しようか…。

「……正義の味方？」

それしか言えなかった。だってそんぐらいしか説明できないもん！

「あ…。わかったよ。で、阿神をどうするの？」

「……えっ？どうするって？」

そっぴいえば俺は阿神をどうしたいのだろうか…。

「……阿神……。」

「佐神？」

舞ちゃんが心配そうに顔を覗き込む。

「……なんでもないよ。俺は…。」

俺は走り出す。覇神がこちらをみた。なぜくるんだ？という目で訴えてくる。構うものか！

「阿神を止める！原因は俺なんだから！」
走る！阿神のところまで！！

「……………にや。」

「！！くるんじゃない！佐神君！！」

「そういう訳にはいかな……………」

パン！！

「……………かはっ！？」

ドサツ！

阿神に撃たれた…？

「佐神君！！」

「佐神！！」

「くっ！しまった！！」

あれ？からだがあつい。
どうしてだ？

「佐神い！！しっかりして！！」

躲神舞は激昂する。

「さ、佐神君！！いやぁ！！」

躲神美香が泣き崩れる。

「佐神君！！大丈夫か！？佐神君！！」

霸神は返事を待つ。

「勇刀…お別れね。」

阿神は佐神を嘲笑うかのように言う。そして、それが引き金になったかのように気を失った。

「……………。」

痛みがないな……。こりゃヤバイな……。死んだな、今度こそ……
阿神……。悪いな、おまえを止められなかったよ……。クソ親父め……。

どこまでも広がる、おおきな青空。しかし、所々積乱雲が見える。それは薄れゆく意識の中、佐神勇刀がみた最後の景色だった。

広い屋上には四人の人影が見えた。霸神謙司、躲神美香、躲神舞、そして……。まるで電池が切れた人形のように倒れている、阿神華奈がいた。

「佐神……。返事をしてよ……。」

「佐神君……。起きてよ……。死んじやだよ。」

躲神姉妹は、佐神の名を呼び続けた。返ってくる答えは……。

「……………」

無言だった。

「まさか…阿神ちゃんを……？」

霸神は気絶している阿神の傍でしゃがみ込んでいる。

「…………」。何を企んでいるんだ。沙神鷹尋……。」

霸神はそっと立ち上がると、拳をぎゅっと握りしめた。

……………ここはどこだ？俺は学校の屋上にいたはず。

『おまえは撃たれたんだよ。勇刀。』

（っ！？だれだ！）

いきなり聞こえた声に佐神は驚いた。

『おれか？おれは沙神狂。もう一人のおまえさ。』

（沙神…狂……。）

先程聞いたばかりの名前を聞いた佐神。

沙神狂……。佐神勇刀の中に封印されている存在である。

その狂が佐神勇刀に話し掛ける。

『なあ、勇刀？……………くやしいか？』

低く、何かを誘うような声で狂が聞いてくる。

（……………くやしい、というより哀しい。）

『……………』

（だってよ？俺、阿神に撃たれたんだよ。仲間だと、友達だと思っ
ていた阿神に！哀しいよ！！）

『……………』

（……………もう、さ。嫌になったよ…。狂……………あんた俺の身体使えば
封印から開放されるんだろ？）

『……………そうだな。今ならおまえの身体を使えば封印を解くことがで
きる。』

（じゃあさ…。使えよ。俺嫌だよ、もう誰にも会いたくない。だか
ら使えよ。狂。）

自暴自棄になってしまった佐神は狂に自分の身体を使うように言
う。

しかし。

『お断りだ。』

狂は吐き捨てるように言った。

（！どうして…！？）

佐神はまさかの返答に戸惑った。

狂はあんなあ、と言ってから。

『今必要とされているのはおまえなんだ。おれじゃないんだ。』

そう言った。さらに、

『……………おれはな封印されている間、おまえから全てをみていたんだ。

おまえのまわりは良い奴ばかりだ。もしおれがおまえの肉体を使
って復活してみる。おまえが積み上げてきたものは全てパーだ。そ
しておまえのまわりにいたやつらも、哀しみにくれるだろうよ。』
それにな、と狂は続ける。

『おれはそんなに外の世界に憧れてない。そりゃ全くない、といえ
ば嘘だ。ただどな……。……勇刀。』

(……………なんだよ。)

『耳を澄ませてみる。聞こえるだろう？おまえを呼ぶ声が……。』

(え……………。)

言われ佐神は耳を澄ませる。

佐神君！！

佐神！！

目を覚まして！！

私達を放つていかないで！！

(この声は……………？)

『美香ちゃんと舞ちゃんだろ？この声。』

(どうして俺を呼んでいるんだ？)

『おまえが目覚まさないからだよ。いい加減起きてやれよ。』

ほら、いつてやれ。と佐神を促す狂。

(……………いいのか？狂。)

『ああ。行けよ。勇刀。そうだな……。……。今回のこれで封印も弱ま
ったしな……。おまえが危なくなったら助けてやるよ。』

佐神は目をまるくした。

(どういうことだよ？狂、なんでそんなことを……。)

『ん？おれの厚意だよ。おれの存在があつたからおまえがこんな辛
い思いをしたんだ。』

その詫びだ。』

狂は飄々(ひょうひょう)と語る。

(ありがとう、狂。じゃあ俺、戻るよ。)

『ああ。気をつけろよ。』

佐神の意識は、そこで終わってしまった。

「……………おはよう…。二人共。」

「「佐神（君）！！」」

目を覚ました佐神は、いきなり二人に抱き着かれた。

「……………えぐっ……………うう。佐神君！ふわぁあん！」

「うわぁあん！佐神い！……………よかったぁ！」

前者は躲神美香のもの。後者は躲神舞のものである。

「二人共、なに泣いてんだよ…。俺は生きてるよ。」

「佐神君！無事だったのか！」

覇神は信じられないといった感情で言った。

「ええ、まあ。……………！そうだ阿神は！？」

佐神は思い出したように阿神へ駆け寄った。

不思議なことに佐神の身体には傷一つなかった。狂が手助けして

くれたのだろうか？そう思う佐神だった。

そして阿神のもとへ辿りついた。

「阿神…！しっかりしろ！阿神！！」

何度も阿神の身体をゆすった。

「……………ううん……………」

うつすらと目を開ける阿神。そして視界に佐神の姿が見えた瞬間……………。

ドンッ！！

佐神を突き飛ばした阿神。そして彼女は屋上のフェンスを乗り越えた。

佐神はそれを声で制する。

「何をしているんだ！？阿神！！」

佐神は阿神へ近付く。

「来ないで…。勇刀。来ないで！！」

阿神は涙を落としながら叫んだ。佐神は思わず立ち止まる。

「……阿神……」

阿神の名を呼ぶ。

「やめて！……やめて……」

佐神の声を拒絶する。

「やめて………勇刀……。あたしは………責任をとって死ぬから……」

「……なにを言っているんだ？阿神……。どうしてお前が死ぬ必要があるんだよ？」

阿神が言ったことに疑問を抱く佐神。

「……ないだろ？第一、責任ってなんだよ？」

「………勇刀……。あたしはね？あなたに嘘について、そして殺そうとしたのよ？……もうあなたの前にはいられないわよ。」

「！そんなことは……、」

「そんなことがないなんて、安易に否定させない！」

「！？」

阿神は強く言い放った。そして続ける。今度は弱々しい声で。

「……あなたが良いって言っても、あたしは良くないの……。あたしがあなたを殺そうとしたのは紛れも無い事実だから………」

「………なんだよ、それ。阿神……。本気で言っているのか？」

佐神は怒気をふくんだ声で聞いた。

「………本気よ……」

阿神は決意の意を示すような瞳を佐神に向けた。

佐神は俯いた。

「………そうか………本気なのか………」

なら仕方ないな。と佐神はつぶやき、一言付け足した。

「じゃあ俺は、お前が死んでから直ぐに死ぬかな。」

その場にいる全員が佐神をみつめる。

場の空気が凍る。佐神は阿神に近付く。

「それなら俺は納得できる。」

「……何言ってるの？勇刀？なんであなたが死ぬ必要があるの？…

…ないわよ、そんなの。」

「いや、ある。」

佐神は言い切った。

「もしお前が死んだら、俺は罪の意識に苦しむだろう。俺はそんなのは御免だ。だからお前が死ぬのなら俺も死ぬ。その方が楽だ。」

「……勇刀……。それじゃあ、あたしが死ぬ意味がないじゃない！」

阿神は激昂する。しかし佐神はそれに動じない。

「意味はあるさ。」

「えっ？」

「お前が死ねば、俺も死ぬ。俺が死んでしまえば狂が出てくるんじゃないのかな？そうなら当初の目的は達成されるじゃないか。」

「……本気で言っているの？」

「ああ、本気さ。」

佐神は真っ直ぐに阿神を見つめる。

それに耐えられなくなったのか、阿神はとうとうへたりこんでしまった。

そしてついには泣き出してしまった。

「うう……ぐす……。ゆ、勇刀は……。死んじゃ……。ひっく、駄目よ……。」

佐神は阿神へ更に近付く。そして声をかける。

「なあ阿神、帰ろう？もう変な意地張らずにさ。」

「うん……。うん。…勇刀……。」

「なんだ？」

「……。ありがとう。」

「良いってことよ。」

清々しい朝の空気。季節もすっかり夏色である。

しかし、ここにいる佐神勇刀はそんな朝を感じることが出来なかった。

場所は学校への通学路の途中。佐神勇刀は歩いていた。

「……なあ？阿神……」

「なに？勇刀。」

佐神は横にいる阿神に声を掛ける。

腕に腕を絡ませている形の阿神に……

「なんで腕組んでいるだ？」

「駄目？」

阿神は上目づかいで佐神を見る。予期せぬ表情に佐神は慌てた。

「駄目、てことは……ないけど……。どうしたんだよ？朝からおかしいぞ。お前。」

「そんなことないわよ？」

という訳で勇刀の了承ももらったから……。」

ガバツ！

「うわあ？阿神！なにするんだ！？」

阿神は佐神の腕に抱き着いた。もちろん佐神は慌てる。

「さすがにこれは恥ずかしい！！離してくれ！！？」

えー？という顔で阿神は抗議した。

「どうしてよう？」

ぷーと阿神は頬を膨らませる。

「どうしてって！普通こういうのは、恋人同士がするもんだろ！！」

佐神はぶーたれる阿神に抗議をする。だが阿神は引き下がらない。

「……じゃあ恋人になればいいじゃない……。」

「……………は？」

何を言っているんだ？佐神はそう思った。しかしすぐに考えを改めた。

「……って、冗談いうならもっともらしい嘘をつけよ。バレバレだ

ぜ？」

やれやれと手の平を上に向け顔の横で広げる。

「えっ？ち、ちが…、」

「ほら、急ぐよ。そろそろいかないと遅れるぞ？」

腕を解き歩き出す佐神。阿神はしょんぼりと佐神についていく。

阿神は思った。

どうしてこんなに鈍感なんだろう？ と。

キンコンカン♪

朝の始業チャイムが鳴る。朝から阿神の冗談はきつい。結構ドキドキしたんだぞ？

……でもあれは百パーセント嘘だろうな。阿神と俺が恋人同士？なにそれありえないー！！

ともあれ今俺の隣にいるはずの阿神はいない。休んでいた分のテストを受けにいっているようだ。

ガラガラ。

「みなさーん♪オッハー♪」

やはり一昔前に流行った挨拶で、担任教師新山千春は教室に入ってきた。

「えーと、今日の一時限目のHRは、成績表を配りまーす♪」

な、なんだってー！！

クラスが騒ぎ立てる。しかし新山先生は続ける。

「順位も出てますよ♪」

ぐはあ！！

なんという、朝からのワンツー攻撃。

「残念ながら阿神ちゃんは今休んでいたため、順位からは除外されてまーす♪」

くっ！阿神めうらやましい！今回のテストは難しすぎたからな…。
順位が公表されずにすむのはうらやましい！

俺が通っている学校は各学年ごとに、順位が公表されるシステム
になっている。しかも、でかでかと。

そんな訳で俺達生徒は死ぬ気で勉強をしている。……恥をかかないように。

「佐神くん」

はっ！まさか俺の順番が回ってきたのか？

「……はい。」

差し出された、閉じられた成績表を受け取る。

「……す……は佐神君です……です……」

受け取る時に先生に何か言われた気がするがもう俺の耳には入らない。

その後、俺は一時限目が終わるまで成績表を開けなかった。

キンコンカン

「じゃあ授業は終わりです、委員長」

礼をし、俺は糸が切れたように席についた。

とそこに……。

「佐神君、どうだった？」

「佐神、よかったんでしょ？」

躲神姉妹のご登場だ。

俺は言った。

「怖くて開けてないんだ。……二人はどうだった？」

まってました。といわんばかりに二人はニコツとした。

「佐神君のおかげで、」

「私達トップ30に入れたの。」

おお、すごい。二人共頑張ったんだなあ。

「佐神の開けていい？」

「ああ、いいいいいよ。でも俺には見せないでね。怖いから。」

そっういい俺は机に突つ伏した。横からええ？と言う声が聞こえる。
はあ、そんなに悪いのか…。

「佐神君、すごい。」

「上位三位に入ってるって聞いたけど……、すごい。」

「……………ええい！もう見てやる！」

俺は成績表を広げて見ている二人から、それを取り上げた。

「……………えっ？」

俺の時間が止まった。成績表に書かれた文字は……。

2 - A	佐神勇刀
現国	95点
数学	100点
歴史	96点
地理	92点
物理	96点
英語	98点
合計	577 / 600
平均	96.2
学年順位	1位
全校順位	3位

「……………な、なんだってええー！？！？」

その後、俺はぶっ倒れて、保健室に運ばれた。

放課後…………。

「佐神君、大丈夫？」

「大丈夫だよ美香ちゃん。」

「本当に大丈夫？」

「大丈夫だって舞ちゃん。」

「…………む…………。」

なんで勇刀はあの二人を名前で呼んでるの？納得いかない。
どうしてなのよ。朝だって、てんで相手にされなかったし……。

「…………勇刀…………。」

「ん？呼んだ？阿神。」

しまった。つい声に出して…………！

「…………ううん…………。なんでも…………ない。」

「……………？？そうか？」

「……………！！…………」

はう、格好悪いな。勇刀に何言っても無駄なのかな……。

…………あれ？なんだろう、躲神さん達がこっちに…………。

「ちよつと…………。」

小声で話しかけてきた。まるで勇刀に聞かれないように…………。

「阿神…………佐神のこと…………。」

「阿神さん…………そうなんですよ？」

ま、まさかこの二人も……………？

「あなた達…………勇刀のこと…………。」

二人は無言で頷いた。

勇刀、もてもてじゃない！？あたしがいない間に二人も…………。

「二人は勇刀と付き合ってるの？」

「……………まさか………………………………。」

えっ？なんで急に二人共テンションが下がって？

「…………いつまで経っても、何も変わらないの……………………。」

あたし達は顔を見合わせて同じことを言った。

「『鈍感すぎ？』」

一体なんだ？三人で話し始めて…。気になるじゃないか…。
って、いきなり三人で笑い始めた！？

「あの…。もしもし？」

話しかけた俺を三人がジト目で見てくる。そしてこう言った。

「『鈍感。』」

「……なにがだよ？」

なぜかその後、俺の家で三人の交流会が行われた。俺は仲間に入れてもらえず…部屋でドラえもんを読み続けた。

アハハ、おもしろいなあ………。

…俺は枕を濡らした。

なぜか自分が虚しくなったからだ。

…もういいや。寝よ。

ガチャ。

「勇刀…。……あれ？」

「どうしたの？華奈ちゃん、…あつ。」

「どうしたの？…あつ。」

三人が見たのは……。

ベッドに本を散らかした状態で、枕を濡らしてふて寝をしている
佐神勇刀だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4995f/>

十～ten～

2010年10月9日18時57分発行